

より充実した信仰生活のために

# 信徒必携

福音交友会

信徒必携

より充実した信仰生活のために

福音交友会

# 信 徒 必 携

	序 文	信 徒 必 携 用 次
<b>第一章 信仰告白</b>		
<b>一、教会生活</b>		
1 主日礼拝		
(1) 礼拝の意味		
(2) 主日礼拝の意味		
(3) 主日（聖日—日曜日）について		
(4) 主日を守ること		
(5) 主日礼拝のプログラム		
(6) 主日礼拝の心構え		
(7) 主日の過ごし方		
2 聖礼典		
(1) バプテスマ		
(2) 聖餐式		
3 諸集会		
(1) 祈祷会		

12 11 11 10 10 9 7 5 4 4 3 3 3 3 1

4 宣教	(1) 国内宣教
	(2) 海外宣教
5 交わり	(1) 交わりとは
	(2) 交わりの秩序
6 献金	(1) 献金の意味
	(2) 献金の祝福
	(3) 献金の種類
	(4) 献金の心得
	(5) 献金の用い方
7 奉仕	(1) 教会員としての奉仕
	(2) 教会学校における奉仕
8 役員会	(3) 役員としての奉仕
二、教会組織と秩序	
1 信徒	
2 牧師	
3 牧師と信徒との関係	
4 教会総会	
	(1) 教会総会において処理する事項
	(2) 教会総会の運営に際して注意すべきこと
5 役員会	
6 福音交友会	
	(1) 福音交友会と各個教会
	(2) 各個教会
7 各個教会	
	(1) 協力伝道
	(2) 転出・転入
三、教育	
1 教会学校	
2 信徒教育	

## 第二章 キリスト者の個人生活

### 一、個人とは

#### 二、個人生活の目的

#### 三、個人生活の三つの領域

3

献身者教育

1

神に対して

2

隣人にに対して

3

自分に対して

### 四、個人生活の確立のために

#### 1 聖書を読む生活

- (1) 聖書を読む基本的态度
- (2) 毎日規則正しく読む
- (3) 理想的な聖書の読み方
- (4) 聖書を読む助けとなるもの
- (5) 聖書のみを多く読もう
- (6) 聖書に従おう

#### 2 祈りの生活

- (1) 祈りのあり方
- (2) 祈りの内容

#### 3 集会を守る生活

- (1) 諸集会に出席する恵み
- (2) 個人的な生活設計

#### 4 あかしの生活（キリスト者の実際生活上の注意事項）

- (1) ことばによるあかし
- (2) 生活態度によるあかし
- (3) からだの節制
- (4) 异性との交際
- (5) ことば
- (6) 金 銭
- (7) 趣味・娯楽
- (8) 酒・たばこ
- (9) 時間の管理

## 第三章 家庭生活

### 一、家庭の形成

#### 1 結 婚

- (1) 結婚の目的
- (2) 結婚の備え

(3) 祈りによる備え	75
(4) 配偶者の選択	74
(5) 交際	73
(6) 婚約	73
(7) 結婚式	72
2 独身	71
3 再婚	70
4 やもめとしての生活	69
5 離婚	68
6 やもめとしての生活	67
7 親のあり方	66
8 子供のあり方	65
9 嫁と姑の関係	64
10 娘の夫婦の問題	63
<b>五、家庭と教育</b>	
<b>六、家庭の諸問題</b>	
1 出産	62
2 献児式	62
3 子供のしつけ	61
4 病気や事故	61
5 親離れ子離れ	61
6 家庭と職業	61
7 家庭と中年の危機	61
8 熟年と老年	60
9 死	60
<b>七、結婚式の手引き</b>	
1 式の目的	59
2 準備	59
3 日時	58
4 場所	57
5 式と披露宴	56
6 実際	55
<b>八、葬儀の手引き</b>	

1 教会に連絡する	89
2 遺体の処置	88
3 死亡診断書	88
4 死亡通知	87
5 式場	87
6 葬儀のプログラム	87
① 納棺式	86
② 前夜式	86
③ 葬儀	85
④ 火葬場にて（埋葬式）	85
⑤ 拝骨	84
⑥ 納骨式	83
⑦ 記念会	82
⑧ 墓地	82
7 葬儀に関する注意	81
① 供え物	80
②弔辞	80
③ 未信者の葬儀	80
④ 教会員の配慮	80
一、政治	79
1 政治の聖書的意味	79
2 政治に対するキリスト者の責任	79
① 祈ること	79
② 政治への参加	79
3 教会と国家との関係	79
二、職業	78
1 労働の聖書的意味	78
2 職業の選択	78
3 勤く態度	78
4 労使関係	78
5 職場でのあかし	78
6 曜出勤	78
三、対人関係	77
1 日本社会の対人関係の特徴	77
2 聖書から見る対人関係	77
① 主にあって自立した生き方	76
② 共に生きること	76

#### (3) 権利意識

### 四、伝統的宗教行事

1 祖先崇拜	①由来	90	90	90	89
	②死者（祖靈）崇拜・追善供養				
	③祖先の追慕・親族の交わり				
	④あかし				
2 習俗	①「村」・地域の祭り	95	94	93	93
	②「国」・天皇の祭祀				
	③習俗論				

## 序文

このたび、福音交友会信徒必携の改訂を行なうことができたことを、心から主に感謝したいと思います。

今回の改訂は、内容を根本的に変更したものではなく、文字の訂正や文章の整理などを基本とし、必要なところには新しい項目を加え、キリスト者がその生活の全領域にわたって、より実際的に適用することをめざしたものです。もちろん、これで完全というものではありませんが、福音交友会の教職者が、約一年九ヶ月の歳月を費やし、祈りと研鑽の結果、完成したものです。

全体は、教会生活、個人生活、家庭生活、社会生活という大きな項目から構成され、そのもとに実際的な課題が取り扱われています。ですからこれは、洗礼準備クラスはもちろんのこと、個人的に読み、應用することができますし、数人のキリスト者が集まり、実際生活の訓練や、互いに励まし合うためのテキストとして用いることもできます。この必携をきっかけとして、より複雑で困難な問題に対しても、聖書から神のみこころを求めて悟り、適用できるようになられることを切に祈ります。

また私たちは、この必携が、福音交友会信仰告白解説書、「私たちの信仰」と併用されることを願っています。解説書は、私達の信仰内容を解説したものですし、必携は、それを実際生活に生かす助けとなるものだからです。

最後に、本書の改訂に労された先生方に感謝しつつ、神が本書を豊かに用いられるように、心からお祈りいたします。

一九九二年一〇月

## 福音交友会信仰告白

私たちは次のことを信じ、告白します。

一、旧新約聖書六十六巻は、原典において靈感された神のことばである。それゆえ聖書は、神が救いについて啓示しようとされたすべてのことを含み、信仰と生活の唯一絶対の規範である。

二、生けるまことの神は、唯一であって、父、子、聖靈の三位において永遠に存在される。

三、父なる神は、天地万物を創造し、これを保持し、統治される。また、主権をもって、人を救いに選び、贖いの計画を全うされる。

四、子なる神、主イエス・キリストは、まことの神、まことの人である。主は聖靈によってみごもつた処女マリヤより生まれ、すべての人の罪のために十字架にかかり、死に、葬られ、三日目にからだをもってよみがえり、天に昇り、今、神の右に座し、私たちのために大祭司の務めをしておられる。やがて、みからだをもって再臨される。

五、聖靈なる神は、人格を持ち、罪と義とさばきについて人にその誤りを認めさせ、新しく生まれさせ、キリストに結びつけ、救いの保証となられる。聖靈はすべての聖徒に内住し、聖化し、

助け主、教師、導き手として働かれる。

六、人は神のかたちに創造されたが、父祖アダムがサタンの誘惑により神の戒めを破り、罪を犯したため神との交わりを断たれた。その結果、人は罪の性質をもつて生まれ、その思いも言葉も行為も罪ある者となつた。それゆえ、すべての人は靈的な死と肉体的な死の下におかれ、永遠のさばきに定められている。

七、人は神の選びを受け、キリストを信じることによって、キリストの身代わりの死と復活のゆえに罪を赦され、義と認められ、死からいのちに移される。また、神の子とされ、御子に似たものへと変えられてゆく。ひとたび救われた者は決して失われることなく、永遠に保たれる。

八、教会は、聖霊により召し出された者によつて構成されるキリストのからだであり、そのからだはキリストである。教会は礼拝を守り、聖礼典を執行し、宣教の使命を遂行して、主の再び来られる日を待ち望む。

九、神はこの世をさばくため日を定めておられる。その日、主イエス・キリストは再臨され、キリストを信じる者は携挙され、主とお会いする。その後、主は地上に千年王国を打ち建てられる。サタンはさばかり、永遠の火に投げ込まれる。すべての人はからだをもつて復活し、救われた者は永遠の祝福を受け、滅びる者は永遠の刑罰を受ける。

## 第一章 教会生活

### 一、教会生活

教会とは、建物を指すのではなく、主イエス・キリストを自分の救い主として個人的に受け入れたキリスト者の群れのことを言います。それゆえキリスト者は孤立して生きるのではなく、時代を越えたキリストのからだとしての普遍的な教会に属するとともに、一地域教会に所属し、忠実な教会生活を営みます。教会生活とは礼拝、交わり、奉仕などを通して主イエス・キリストに仕えることです。

#### 1 主日礼拝

##### ① 礼拝の意味

神から離れ、罪の中に死に、永遠のさばきに定められていた者が、キリストの尊い救いにあずかった時、心から神を崇め、感謝と賛美をささげ、神が求めておられるものがなんであるかを聞こうとし、それに従いたいと願うようになるのは当然です。礼拝とは、救われた者が、語られる神のみことばにお応えして、祈り、賛美し、ささげものをもつて、神への信仰、愛、喜び、感謝、服従、献身を表明することです。

##### ② 主日礼拝の意味

キリスト者は、神に日々ささげる個人礼拝と、他のキリスト者と共にささげる公の礼拝を守ります。公の礼拝は、主日礼拝といって週の初めの日曜日に、主の復活を記念して一堂に集つ

て神にささげます。

主日礼拝は、キリストにあって一つとされた者たちが、同じ救い、同じ信仰、同じいのちにあずかっていることを覚え、主にあって一つにされていることを感謝し、一つのからだとして主にお仕えし、一つとなつて主に献身を表明する機会です。ですから、一人で聖書を読み、賛美し、祈り、必要なところに献金しているからといって、主日礼拝をおろそかにすることは信仰生活を正しく理解していかないことで、誤った考え、間違った態度です。主日礼拝を大切にすることは、神のみ旨にかなつたことです。

### (3) 主日（聖日一日曜日）について

神は六日間の創造のわざを終えて、第七日目を祝福し、聖とし、安息されました。それ以来、週の第七日目の土曜日を聖なる日、祝福の日、安息の日と定められました。しかし、時が満ちて、救い主イエス・キリストは、十字架の死と復活を通して、永遠のいのちを与えてくださり、真の安息と祝福と聖別の主として自身を表わされました。旧約聖書の時代は儀式を通してその意味が教えられましたが、キリストが週の初めの日に復活し、いのちの不滅を明らかにされた時以来、キリスト者は信仰によって日曜日を「主日」として守つているのです。

### (4) 主日を守ること

主日を守るとは以下のようなことで、ただ礼拝に出席するということだけではありません。主日を守る意義をよく理解しましょう。

①その日は、神が語つてくださるみことばによつて、祈りを通し、賛美を通し、交わりを通して

して靈的安息を味わう日です。勝利者なるキリストこそ、信じる者に安息を与えてくださる方です。この方を心から礼拝する日です。

②信仰の訓練を受けるために、その日を特に主にささげます。キリスト者は、その日に教会に集まり、自らの信仰を深め、聖餐にあずかり、兄姉との交わりをなし、賛美し、祈り、奉仕することによって訓練されるのです。

③神から与えられた聖靈の宮である肉体を正しく働かせるために、仕事、学びをやめて安息するのです。からだをむやみやたらに働くことは、聖靈の宮を傷つけ、たましいを弱めることになります。正しい休息をもつて力強い信仰生活を続けましょう。

### (5) 主日礼拝のプログラム

①前奏——これは、神を礼拝するために集まつた一人一人が心を静め、神のみ前に出るにふさわしく、自らの靈性を整え、生ける主のご臨在を待ち望むためです。礼拝は前奏によつて既に始まつてゐるのです。私語を慎み、静かに席について主のみ前に祈つて備えましょう。

②頌栄——これは、礼拝する者が三位一体の神を、畏れと信仰をもつてほめたたえる賛美です。いつも歌われる頌栄を覚えて、信仰をもつて賛美しましょう。

③祈り——これには、司会者による祈り、説教者による祈り、また閉会と献金感謝の祈りがあります。これらの祈りは公の祈りであつて、家庭などの個人の祈りとは違っています。一人一人の心が主に向けられ、心から賛美と感謝をささげ、語られる神のみことばに正しく応答できるように一同を代表して祈ります。また公の働きのための

とりなしや、信徒のための公のとりなしも致します。司会者は前もって祈りの準備をしておきましょう。全員がアーメンと心から言えるように、しつかりした声で祈る必要があります。

④使徒信条－これは、キリスト教会の信仰告白ですから、大声を合わせて読めばよいのです。ではありません。自分の信仰告白として、信仰をもつて、明白に言い表わします。

⑤賛美歌－これは、心から湧き出る感謝と喜びの表われです。また礼拝を靈的に整える働きをします。よく内容を味わいつつ、心から主を賛美しましょう。

⑥交説文－これは、司会者と会衆がみことばを交互に読むことであり、その意味や必要は次のようなところにあります。

ⅰ既に賛美によって、神に対して開かれている私たちの心が、更にみことばそのものによって、神の恵みと語りかけに対して開かれるために必要です。

ⅱ不思議な神の摂理によって一つの礼拝に出席した者たちが、キリストにある交歓を経験するところに意味があります。

ⅲ会衆の一人一人が積極的に礼拝にかかることができるところに意味があります。

⑦聖書朗読－これは、メッセージの予告ではありません。朗読自体大切なものです。神のことばを、敬虔な心と熱心な思いをもつて聞きます。朗読者もそのことを覚えて、前もつてその箇所をよく読み、神の権威を確信して朗読しましょう。

⑧メッセージ－礼拝の中心は神のことばを聞くことです。説教者は神のことばを正しく理解

し、正しく適用できるように説き明かすのです。メッセージをどのように聞くかによつて、神への信仰の態度と信仰者としての生き方が整えられます。賛美、祈り、献金は、メッセージへの応答としての性質も持つていて、それを、合わせて覚えたいものです。

⑨献金－礼拝とは、自分のすべてを神にささげることです。その具体的なしるしとして神にささげるものが献金です。献金はメッセージの聴講料ではありません。前もつて祈りのうちに献金を準備しておきましょう。

⑩祝祷－これは、公的礼拝の終わりに、礼拝出席者のために神の祝福を求める祈願であるとともに、また、その祝福の宣言でもあります。聖書には、この祝祷の原型が数多く残されています（民数六・二三～二六、ロマ一六・一〇、コリ一三・一三、エペ六・二三～二四、ヘブ一三・二〇～二一ほか）。会衆全員は、この週も神の祝福の内に過ごすことができるという確信と、キリストの証人として世に遣わされてゆくという決心をもつて、アーメンと唱和しましょう。

## ⑥主日礼拝の心構え

キリスト者の信仰生活において大切な教会生活、しかもその中心である主日礼拝を正しく守るために、どのような心構えが必要でしょうか。

①信仰と喜びをもつて、強い意志を働かせて主日礼拝を守ることが大切です。自分の気持ちや都合で欠席することがないよう心がけたいのです。どんな犠牲を払ってでも主日礼拝を守ることこそ礼拝者的心です。もし欠席した時は、その理由を主の前で検討し、必要な

場合は悔い改めることが大事です。

## ②出席できない時

病気その他の事情で、どうしても出席できない時は、牧師に連絡して祈つてもらうようになります。その日になつて急に出席できなくなつた時も、その旨連絡しましよう。理由のわからない欠席は、他の兄姉に不必要的心配を与えます。自分が教会の一員であることをいつも自覚してキリスト者にふさわしく行動しましょう。

## ③礼拝の時間

礼拝に遅れることは、礼拝を守っている人々の妨げとなるだけではなく、神に対して不敬虔なことです。定刻の五～十分前に教会に到着し、静かに着席します。礼拝前の会話は最少限のあいさつ程度にしておき、神との交わりを第一にします。大声や不必要なことばをかわさないように注意します。聖書を読んだり、週報に目を通すなど、祈りのうちに主のご臨在を覚えて心と態度を整えましょう。やむをえず遅刻した時は、聖書朗読や祈りの途中であれば、終わるのを待つてから静かに入るようにしましょう。そして、礼拝の一部が守れなかつたことを、主に心からおわびしましょう。

## ④メッセージを聞く態度

メッセージは、神の導きのうちに祈りと信仰によって備えられたみことばの説き明かしです。それは、神の語りかけにほかなりません。直接神が語りかけてくださることばとして受け入れる態度が必要です。そして聞いただけで終わらないように、内容をメモし、自分

で聖書を開き、瞑想し、実践することができるよう努めましょう。

## ⑤座席の隣りの人

聖書、賛美歌などを使うのに慣れていない人の隣りに座つた時は、そつと助けてあげましょう。

## ⑥服装について

主を礼拝することを覚えて、質素なものを身につけるようにします。しかも、誰の前に出てもよいような、きつちりとした身なりを心がけ、頭髪にも注意しましょう。

## ⑦礼拝後

神との交わりの後は、兄姉が主にあつて交わる大切な時です。互いに徳を高め、祈り合えるような靈的な交わりを持つようにし、特に新来会者との交わり、また個人伝道には心を注ぎ、世間話や、仕事や商売の話などが中心にならないように注意しましょう。

## ⑧家族と共に

キリスト者は、家族と共に礼拝するように心がけ、幼い子供だから、騒がしいからといって特別扱いしないようにし、幼い時から家族と共に礼拝を守る訓練をしましよう。なによりも、それぞれの家庭において日頃から訓練しましよう。また各信徒も協力しましょう。

## ⑨礼拝中

奉仕を理由に礼拝中に会堂内を歩きまわつたりしないようにしましょう。また座席を離れないようにしましょう。礼拝中の電話の取り次ぎはやめるようにしましょう。

## ⑩主日の過ごし方

主日は、礼拝を守ればそれでよいのではありません。週日にできない主にある交わりや奉仕のために用います。そして、家族との交わりやからだの休息のために用いるようにします。他の六日間でできること、しなければならないことを主の日に持ち込まないようにしましょう。仕事、学び、買い物、洗濯などは前日までに済ませておきましょう。

## 2 聖礼典

主イエスは、バプテスマと聖餐式の二つの聖礼典を守り行なうように命じておられます。代代の教会は、これを重んじて忠実に守ってきました。

### ①バプテスマ

#### ①バプテスマの意味

バプテスマは、古き人がキリストと共に十字架に死に、キリストの復活と共に新しいのちを受けた体験を表わす象徴です。罪を悔い改め、救いにあずかった者は、このバプテスマを授けられることで、神と教会の前に自らの信仰を公に表明することになるのです。

#### ②バプテスマを受ける備え

バプテスマは、イエス・キリストを救い主と信じた人々が、主の命令に従つて受けるものです。それによって救われるのはありません。キリストを信じた者は、聖書の根本教理、信仰生活の基礎をよく学んでからバプテスマを受けるようにします。

#### ③バプテスマを受けてから

バプテスマは、信仰の完成でも終わりでもありません。バプテスマを受けることによつて

教会員となるのですから、忠実な教会員としての生活に努めましょう。そして、良き証人として靈的成長に励みましょう。

## ②聖餐式

### ①聖餐式の意義

聖餐はキリストの死、すなわちキリストのからだが裂かれ、血が流されたことを象徴的に示しています（一コリ一一・一二・三二～三三）。救いにあずかっている者がそれを受ける時、文字通りキリストのいのちをいただき、罪の赦しに入れられていることを深く体験せられる機会となります。

#### ②聖餐にあずかる心構え

主イエス・キリストを救い主と信じ、その信仰を公にし、キリストに服従することをバプテスマを受けることによつて表明した人がこれにあずかります。そして、これにあずかることによつて主イエス・キリストへの感謝と服従を表わし、また主にある兄姉がキリストのいのちにあずかって一つであることを表わします。聖餐式を軽んじる者は、主イエス・キリストとその約束とを軽んじる人です。自らを吟味してあずかります。教会で定められた聖餐式には、必ずあずかるようになります。

## 3 諸集会

教会には、主日礼拝以外にも多くの集会があります。キリスト者は、主日礼拝を守るとともに、諸集会を守ることによって、訓練を受け、交わりを深め、靈的に成長し、キリストの教会

を建て上げ、福音宣教のために備えられるのです。

#### ①祈祷会

祈祷会は教会の成長と活動の原動力です。キリスト者が集まつて共に祈る祈祷会は教会の働きを進める上で大切な集会です。初代教会においても祈りは重要な役割を果たし、教会のあらゆる活動も祈りによって始められました。私たちも教会の働きのため、お互いのため、求道者のため、更に超教派の働きのために祈りましょう。

祈る時は、はつきりとしたことばで祈り、祈祷課題や時間をもよく配慮しましょう。一週間の予定の中に、祈祷会の日を入れておくようにしましょう。

#### ②伝道集会

伝道集会は、キリストを知らない人々を対象に福音を伝える目的で開かれる集会です。特に未信者への配慮がなされ、聖書のメッセージがわかりやすく話され、クリスチヤンのあかしもあって、福音理解の助けになります。救われていない家族、友人、知人などを誘い、出席しましょう。信徒は、伝道集会の準備のために積極的に奉仕し、祈りをもって備え、この集会を活発にし、多くの人々をキリストに導くように心がけましょう。

#### ③聖書研究会

聖書研究会では、信仰の土台である聖書を、重点的、計画的に学びます。私たちのからだに食物が必要なように、キリスト者にとっては靈の食物であるみことばは欠くことのできないものです。聖書を学ぶことによって、真理を正しく理解し、健全な信仰が育てられます。また個人生活における聖書の学びにも有益です。キリスト者は神のことばである聖書を大切にし、忠

実で熱心な学びを続けましょう。

#### ④家庭集会

家庭集会は、信徒が自分の家庭を開放して行なうキリストを中心とした集まりです。交わりと祈りと聖書の学び、また伝道のための大切な集会となります。キリスト者、特にクリスチヤンホームの信徒は、自分の家庭を開放し、主のわざに積極的に参加し、成長させられましょう。

#### ⑤その他の集会

教会には、「特別集会」「聖会」「訓練会」「聖書キャンプ」「壮年会」「婦人会」「青年会」などの集会があります。これらの集会は、神の恵みをいただき、私たちの信仰を強める機会となるとともに、信徒同士のよき交わりの機会ともなります。この世の生活に忙しくなり過ぎないようにし、教会の集会には熱心に出席しましょう。

### 4 宣 教

イエス・キリストが教会に与えられた使命は世界宣教です。「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によつてバプテスマを受け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」（マタニハ・一九（二〇））。神は、先に救われた者たちに福音宣教の働きを委ねられました。それゆえ、私たちには委ねられた福音を全世界の人々に宣べ伝える責任があります。滅びる人々のために祈

り、あかしをし、キリスト者としてふさわしく生き、福音宣教のために自らをささげ、喜んで犠牲を払いましょう。

## ①国内宣教

諸教会を中心とした伝道  
伝道集会、教会学校、家庭集会、訪問伝道、トラクト配布などを通して、福音を人々に伝え、キリストに導きます。

## ②協力伝道

諸教会が協力して、ある特別な方法で、特定の対象に向けて行なう伝道です。それらの中には、放送伝道、大衆伝道、文書伝道、青少年伝道、病院伝道などがあります。

## ③海外宣教

日本の伝道は、外国から遣わされた宣教師たちによって始められました。福音交友会の群れも宣教師によって起こされました。

自国の伝道が終わってからではなく、世界宣教に目を向け、祈り、献金し、宣教師を派遣することは主のご命令であり、教会の大切な働きです。一部の人々にまかせるだけではなく、すべてのキリスト者が情熱をもって取り組みましょう。

## 5 交わり

### ①交わりとは

教会はキリストのからだであり、信徒はそのからだの部分です。教会はそのかしらであるキ

リストと、またキリストを通して父なる神との靈的な深い交わりを持つとともに、地上におけるキリスト者相互の交わりを持つことを特徴とします。

信徒の交わりは、私たちの神との交わりの反映です。ですから、礼拝を守ることと信徒の交わりは切り離すことのできないものです。

教会の交わりは、相互理解を深め、連帯感を強くし、お互いを助けるものです。またそれは、信仰を実践する場であり、訓練の場であり、教会を成長させる目的を持つています。交わりによって互いに仕え、愛し、助け、慰め、共に働くという大切なことを学びます。

### ②交わりの秩序

交わりの秩序を守るために、次の点に心を留めましょう。

①キリストを中心とした良い交わりを保つためには、お互いの批判は自重したいものです。もし誤りがあれば、直接に良い忠告ができるよう、またそれを聞き入れる」とができるような交わりを育てるように心がけましょう。

②教会の中に気の合う者たちだけのグループを作ることで、交わりの中に入れなくなる人が出ないように心がけましょう。交わりは、明るく開放的で、麗しいものでありたいものです。

③教会だからといって、特別なことばづかいや、服装を必要とするわけではありません。しかし、互いの徳を高め、愛し合い、尊重し合えることばや服装に心がけましょう。

④愛の交わりを強調するあまり、物品・金銭の貸借、男女交際、責任、約束を守ることなどがないかげんにされてはいけません。神は愛なる方であり、また秩序の神です。他の人に

## 6 献金

### ① 献金の意味

「神は、実に、そのひとり子をお与えになつたほどに、世を愛された」（ヨハ三・一六）。神は私たちすべての者のために、『自分の御子を惜しまずにおえてくださいました。私たちは、この神の愛と恵みに対する応答として私たちの全存在と全生活を惜しみなくささげます。献金は、神の恵みに対する感謝と献身の具体的な表現です。ですから献金は、会費や説教の聴講料やさい錢、お布施とは違います。

また、献金はキリストの大宣教命令（マタ一八・一九～二〇、マル一六・一五）を遂行するためには必要です。

私たちは、キリストへの信仰表明として、また大宣教命令に従うために喜んで献金をします。それによって神のみわざに参加させていただくのです。

### ② 献金の祝福

献金はキリスト者の義務や責任としてではなく、神の祝福、神の恵みへの応答としてささげます。聖書は、献金を「聖徒たちをささえる交わりの恵みにあづかる」（Ⅱコリ八・四）ものと教えていました。神は惜しみながらでもなく、強いられてでもなく、喜んでささげる人を祝福してくださいます。

### ③ 献金の種類

#### ①月定献金

教会によつては什一献金とか聖別献金などと言われています。毎月、各自が金額を定めてささげます。これは教会の経常費の主要な財源ですから、毎月確実に、しかも継続的にささげます。年に何回か、まとめてささげるのは教会運営にとって望ましいものではあります。旧約時代には収入の十分の一がささげられていました（レビ二七・三〇～三二）。

預言者マラキは十分の一をささげない民に対して、神のものを盗んでいると言っています（マラ三・八）。新約時代においても十分の一献金は受け継がれています。信仰と喜びをもつて十分の一をささげましょう。

#### ②集会献金

主日礼拝、その他の集会において、礼拝行為の一部として献金をささげます。

#### ③感謝献金

これは、あらゆる機会に主の祝福とみ守りとを感謝してささげられるものです。受洗、婚約、結婚、誕生、献児式、入学、卒業、就職、病気全快、新築、イースター、クリスマス、ボーナス、退職などの時に感謝と記念の意を込めてささげます。

#### ④指定献金

特別伝道集会や会堂建築など教会の特別な計画や超教派の働き、海外宣教などのために、また、教職者の特別な必要のために指定してささげるものです。

#### ⑤特別献金

被災者の救済、金銭的に困っている人々のためにささげる愛の献金などです。

迷惑をかけないように、また非難されないように、いつもきちんとしておきましょう。

#### (4) 献金の心得

「ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます」（Ⅱコリ九・七）。

##### ① 献金の原則

献金は、聖書の原則に従つてささげることが大切です。

ⅰ 献金は、決して強いたれてするものではなく、各自が自由に自発的に行なうものです。

この原則は旧約時代も新約時代も同じです（Ⅱコリ九・七、申命一六・一〇、一七）。

ⅱ 献金は、各自の収入に応じて、また持つてある程度に応じてささげます（Ⅰコリ一六・二、Ⅱコリ八・二～二二）。

ⅲ 集会献金は、あらかじめ心づもりして、準備しておきます（Ⅰコリ一六・一～二）。

##### ② 献金の責任

教会の予算が総会で決議されたら、各自は積極的に責任を果たすように努力しましょう。

##### ⑤ 献金の用い方

「管理者には、忠実であることが要求されます」（Ⅰコリ四・二）。献金は、よく管理者は、決して無駄な用い方をされてはなりません。そのため、献金を預かる管理者、教会会計係は、忠実で公正であることが大切です。会計報告は、正確になされるべきです。また、教会総会で決められた予算に従つて運用し、指定献金は、その目的のために用います。教会会計係が勝手に支出したり、個人的に立て替えをしたりすることは慎まなければなりません。献金を支出した場合は、なるべく領収証を受け取り、保管するようにしましょう。

## 7 奉仕

「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によつて、それにふさわしく奉仕しなさい」（Ⅰペテ四・一〇～一一）。

奉仕とは、仕えることです。キリストはその模範を示されました（マタ二〇・二八）。精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主にあつて働く心からの行為です。教会は主のものであります。神は教会に宣教の使命を委ねられました。教会の存在の理由と目的はキリストが伝えられ、キリストの御名が崇められて、神の栄光が現わされることにあります。このためにキリスト者は喜んで、教会の内外で奉仕するのです。各自の賜物を生かして、奉仕をさせていただきましょう。一部の人に任せておかないで、皆で教会活動の前進をはかりたいと思います。

#### ① 教会員としての奉仕

教会には目に見えるもの、見えないものと様々な奉仕があります。どんな奉仕であつても自発的に喜んでする心が大切です。数多い奉仕の中からいくつかのものについて以下に列挙してみたいと思います。

##### ① 誰もがすべき奉仕

ⅰ 祈り—教会活動は靈的なものです。それを前進させる原動力は祈りです。教会の様々な

必要を覚えて祈ることは大切です。そしてこれは、賜物に関係なく誰にでもできる奉仕です。

ii 個人伝道－伝道が成果をあげていくには、講壇から福音が語られるだけでは十分ではありません。福音を聞いた人がそれに応答できるように手助けしてあげる必要があります。それが個人伝道です。その人の話をよく聞き、不安や疑問を取り除きつつ、キリストの救いの筋道を伝えます。

iii 助言と励まし－教会には様々な必要を持つた人々がいます。その人の話をよく聞き、ふさわしい助言や励ましを与えることは、その人の助けとなるとともに、教会を建て上げてゆくことにもなります。

## ②集会のための奉仕

i 司会－司会者はよく祈り、自らがまず礼拝者として心から主を賛美し、主を見上げ、みことばを待ち望む姿勢をもつて臨むことが大切です。早めに来て、会場が整っているかどうか調べてください。服装や頭髪、ことばづかいにも注意が必要です。

ii 奏楽－奏樂者は、会衆を神への賛美に向かわせることに深い祈りをもつて心を用います。前奏は、会衆を代表して賛美をささげるものですから、曲の内容をよく理解して演奏することが大切です。会衆賛美も、会衆をよくリードできるように、練習に励みましょう。

iii 受付－受付の奉仕をする人は、新来会者に心を用い、配慮できる人の隣りに案内した

り、来会者名簿、週報や聖書、賛美歌を渡したりします。服装はきちんとしたものを着用し、頭髪やことばづかいにも注意が必要です。

iv 献金当番－献金当番は、新来会者にはよく配慮しましょう。献金の祈りは、その日のメッセージと無関係にならないように、感謝と獻身の思いを込めて、短く祈るようにします。

v 聖歌隊－礼拝や他の諸集会で聖歌隊の果たす役割には大きいものがあります。聖歌隊の奉仕をする人は、好きだからとか上手だからというのではなく、神の栄光のためにするのです。また指導する賜物がある人は、それを用いて良い聖歌隊を育て上げましょう。

## ③教会美化の奉仕

i 掃除－教会堂は教会活動の行なわれるところですから、常に清潔に保たれていることが大切です。掃除当番にあたつたら、忘れずに喜んで奉仕しましょう。

ii 生花

iii 営繕、室内装飾

## ④事務的な奉仕

i 印刷や書類の整理などの教会事務

ii 聖餐の用意と聖餐用具の管理

iii バイブルスマの準備

iv 冠婚葬祭の時の準備

その他、各自の賜物を生かした奉仕、例えば、音楽面の技術、レタリングの技術などは、福音宣教のために大いに役立ちます。主のわざの遂行のために、からだも時間も賜物も惜しみなくささげて奉仕したいものです。

## ②教会学校における奉仕

教会学校は教会の宝庫です。小さい時から主を敬う子供に導くことはどんなに大切なことでしょうか。

教会学校教師は、単に子供が好きだからということでは務まりません。幼い魂を心から愛し、幼い魂でも明確に救われるこことを信じて奉仕にあたらなければなりません。子供の時からキリストを知らされ、信じて生活できることほど幸いなことはありません。この奉仕には確かに多くの犠牲が伴いますが、それだけにやりがいもありますし、祝福されます。

## ③役員としての奉仕

教会役員は教会総会で選出されます。役員、執事など教会によって呼び名が異なっています。役員は教会活動が活発に推進されるために、教会の事務処理を初め、牧師と共に信徒の指導にあたります。

### ①役員の資格

「役員は、年齢や社会的地位、あるいは信仰歴が長いからという理由だけで選ばれてはなりません（一テモ三・一～二）」。

ii) 役員は人の意志や好みによって立てられるのではなく、主よりの任命であることを自覚しなければなりません。そして、その任務は重大です。

iii) 役員はあらゆる点で信徒の模範でなければなりません。伝道、集会出席、静思の時、献金などを忠実になし、聖書をよく理解し、家庭にあつては「子どもと家庭をよく治める人」（一テモ三・一二）でなければなりません。

iv) 牧師の良き補助者となり、牧師と信徒の間に立つて、よく主に仕える人でなければなりません。

・受洗したばかりの人、靈的理解力の乏しい人は避けるべきです。また、転会してきた人がすぐに役員になるのも避けるべきでしょう。

### ②役員の務め

役員は教会の使命が果たされるように、信徒間の一一致をはかり、教会内に分裂が起ころないよう、十分な配慮をしましよう。更に役員は、牧師が「祈りとみことばの奉仕」（使徒六・四）に専念できるように牧師を補佐し、牧師を批判しないように心がけることが大切です。そして、牧師と共に、積極的に教会全般の活動計画を立て、あらゆる宣教活動、教会教育活動の推進をはかりましょう。教会活動の記録の保管、教会の経済状態に対しても心を用い、献金の管理運用、特に、牧師とその家族のために靈肉共に配慮し、経済的なことで、牧師がとまどうことのないようにしなければなりません。その他、教会の設備の維持など実に多くの重い責任を役員は負っています。それだけに役員の務めは光栄ある務めなのです。

## 二、教会組織と秩序

教会はキリストをかしらとするキリストのからだであり、キリストによって、しっかりと組み合わされて成長します。教会は、イエス・キリストを神の子、救い主と信じ、聖霊によって新生している者によって構成され、すべてのことを適切に、秩序をもつて、神の榮光のために協力して働いてゆく群れです。したがって適切な組織と秩序が必要です（エペソ四・一六）。

### 1 信徒

キリストが教会のかしらで（コロ一・一八）、すべての信徒はキリストのからだの肢体であることを覚えてください（イコリ一二・二七）。キリストを救い主と信じている者は信徒であり、互いに兄弟姉妹です。教会員とは、キリストを信じバプテスマを受けた人を言うのですが、キリストを信じている人なら誰でも教会の会員となる資格があります。「バプテスマを受けていないので、自分は部外者、お客様のようなものだ。」と考えないでください。バプテスマを会員名簿に記載する一つの基準にしているだけであって、主にある兄弟姉妹には変わりありません。しかしバプテスマは、主の命令であり、公けでの信仰告白と主への服従の表明なのですから、バプテスマを受けていない方は、一刻も早く自ら進んでバプテスマを志願し、あざかるようにしましょう。

### 2 牧師

牧師は「神の教会を牧せるために」（使徒二〇・一八）神が召され、お立てになつた者で、自分自身と群れ全体とに氣を配りながら、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるために任じられた者です（エペソ四・一二）。

牧師はふつう地域教会ごとに、その教会の規則に従つて、また福音交友会教職者任免と就業についての内規に従つて招聘されます。

### 3 牧師と信徒との関係

教会は、牧師と信徒が一致協力して愛のうちに建てられてゆくものです。そして教会の大牧者はイエス・キリストであつて、牧師ではありません。しかし牧師は、神から遣わされた者として大切な器です。牧師がたとえ若くても、尊敬し、大切にしましよう（イテモ五・一七）。牧師を軽々しく批判せず、もし牧師に不満がある場合には、牧師と直接話し合い、主の前に解決するようにしましよう。

牧師の働きはおもに靈的な働きです。ですから信徒は、牧師がみことばと祈りに専念できるよう協力し、牧師の生活や研修、休暇などの点でも配慮することが必要です。

また、牧師は、信徒のために謙遜の限りを尽くし、信徒は、牧師の靈性と奉仕のために祈ることが大切です。困ったことがあれば、遠慮なく牧師に相談しましょう。牧師と面会したい時は、あらかじめ電話して予約するのがよいでしょう。

教会総会は教会の最高の議決機関です。定期総会と必要に応じて開催される臨時総会があります。教会の総会は牧師と教会員とによって構成され、定足数は各教会の規約に定められています。

### ①教会総会において処理する事項

過去一年間の教勢および会計報告、ならびに活動報告がなされます。新年度の活動方針や計画を決定し、予算案を審議します。また執行機関として役員を選出します。その他、規約の改正、牧師や伝道師の異動なども取り扱います。

### ②教会総会の運営に際して注意すべきこと

総会は教会の最高の議決機関ですから、教会員は責任をもって出席し、発言する場合は主のみ前にあることを覚えて祈りつつ、ことばに注意しましょう。

総会議長は公正で、人の意見を尊重し、総会の進行係としての役目を果たします。

教会の予算是予想収入から支出を決めるのではなく、宣教活動を中心に必要な経費を算出して、それを満たすように祈り、献金するよう努めます。

## 5 役員会

教会総会で選ばれた役員は牧師と共に役員会（執事会）を組織します。教会の規模によって異なりますが、会計と書記は必要です。その他、伝道、奉仕、教育を担当する役員、また壮年会、婦人会、青年会、学生会などを代表する役員があります。役員会は普通、月一回定期的に行なわれます。役員会では、次のようなことが協議されます。

- (1)伝道計画、(2)教会教育、(3)教会の記録、(4)教会会計、(5)信徒の転出・転入、(6)戒規、(7)教会財産、(8)礼典、(9)その他。
- 役員は礼拝出席、奉仕、献金など全てのことにおいて信徒の模範でなければなりません。役員は牧師のために祈り、牧会の手助けをする人です。役員の選出にあたっては、I テモテ三章八～一三節の教えを規準とするのがよいでしょう。

## 6 福音交友会と各個教会

### ①福音交友会

福音交友会は同じ信仰告白に立つ各個教会と宣教団とによって構成されています。キリストをかしらとする教会は世界に一つですが、私たちは福音交友会の教会に属する者であり、その連帯性を覚えて大切にしなければなりません。本会は各個教会の主体性を重んじています。そして各教会が日本のみならず、世界にわたって福音宣教を推進するように協力し、責任分担して尽力し、自立に達していない開拓教会を人的、経済的に援助したり、相互の交わりを深め、と共に信仰の訓練を受けるために、キャンプ、役員研修会などを計画し、実施します。

本会は、正教師と補教師をもつて実行委員会が組織されており、総務部、伝道部、教育部、海外宣教部、奉仕部、財務部、福祉部が設けられていて、その部長は、正教師の中から規約に従つて選出されます。

福音交友会総会では、教職に関すること、教会設立に関すること、福音交友会の行事に関することなどが取り扱われます。このように福音交友会と各個教会とは密接に関係していますの

で、各教会は、自分の教会さえよければよいとは考えず、互いに交わり、宣教の戦いを共にしたいものです。

## ②各個教会

福音交友会の各個教会は、共通の信仰告白を有していますが、それぞれ自給・自立・自伝を原則としています。互いに協力し合いますが、それぞれの教会のあり方について干渉することを避けています。そのようなあり方こそ聖書の示す教会の姿だと信じるからです。

## 7 各個教会と福音交友会外の各教会との関係

### ①協力伝道

福音交友会は異端とは関係を持ちませんが、福音的諸教会・諸団体とは、特に宣教の面で活動を共にし、交わりを持ちます。

主の教会にはいろいろなタイプがあります。ある教会は異言やいやしを強調します。また第二の祝福としての聖霊のバプテスマを強調する教会もあります。聖書の教理のある点で少し理解が違つてもキリストの神性、贖い、聖書の唯一絶対の権威を認めているならば、主にあって一つなのですから、宣教のために教派・教団を越えて、一致・協力して働くことができます。大衆伝道をする場合など、できるだけ多くの教会が参加して共に伝道することは意義深いことです。

教会間の一致、協力という時、制度化され、組織化された目に見える一致の形ではなく、聖書が述べる本質的な一致がまず確認されていなければなりません。これは目に見えない本質的

一致（キリストとの一体性）です（エペソ四・一～六）。そしてこの一致が目に見える形で表現されてくるのです。ところがエキュメニカル・ムーブメントでは、全教会の合同を主張し、それこそ最も良きあかしとなるというのです。しかし私たちは聖書の真理を曲げて行なう、形のみの合同運動には決して同意できません。

福音交友会の各個教会は、聖書的な一致を確認した上で、宣教のために広く協力してゆきます。

### ②転出・転入

信徒の転出の場合には、どんな教会でもいいというわけにはいきませんから、十分に注意を要します。転勤・進学・転宅などで母教会が遠くなってしまうときは、近くの教会に行くことになるわけですが、牧師に近くの福音的な教会を紹介してもらうようにしましょう。聖書的、靈的な交わりができるまで、母教会と連絡をとり続け、その後に転籍するのがよいでしょう。

他教会から福音交友会の教会に転入して来られる場合には、福音交友会の信仰告白に同意でき、その教会の規約を忠実に守ることを約束できる新生したキリスト者でなければなりません。転入のために一定の準備期間をもうけるのがよいでしょう。

転出・転入の手続きは牧師に申し出れば、役員会の議決を経て行なわれます。

### ③異端

キリスト教と呼ばれているものの中には、キリストの神性や聖書の正典性を否定する団体があります。私たちは聖書によつて正統的な教会と異端とを判別する必要があります。現代日本における代表的な異端は、エホバの証人（ものの塔）、統一協会、モルモン教です。このよ

うな団体とはかかわりを持たないようにならぬよう。

### 三、教育

#### 1 教会学校

日本のほとんどの教会には、教会学校があります。主日の朝あるいは午後、場合によっては平日に子供たちに聖書の教育をしています。これは一七八〇年、イギリスのロバート・レイクスによって始められた日曜学校に由来するものです。当初は子供たちのキリスト教的人格形成において善良な市民をつくることを目的としたものでしたが、これがアメリカにわたって大きな発展を遂げ、教会教育における重要な働きをして注目されるようになりました。

教会学校といつても、一般的の学校教育と異なり、教会では普通、週一回、しかも一～一時間半で神のみことばを教育しようと/or>するものですから、内容その他において貧弱になることがあります。夏期学校などはよく準備してなされるなら、通常の教会学校で十分扱えないことを集中的に教えることができ、生徒との親しみも持つことができるのです。

教会学校教育は信仰と忍耐のいる働きです。子供好きであるとか、時間的に余裕があるとか、おもしろそっただからといった理由だけで、安易に教会学校の教育に携わるべきではありません。主から使命を与えられているという確信のもとに奉仕に携わるべきです。

教会学校教育は単に教師だけの働きではなく、全信徒の祈りと協力によって全うされるものです。ですから、信徒は具体的に教会学校教師のために、また生徒の救いのために祈るとともに進

んで協力したいのです。

更に教会学校教育は、聖書を単なる知識として教えるのではなく、教師自身が養われ生かされている神のみことばをあかしするものです。ですから教師は生徒によい模範を示す必要があります。

#### 2 信徒教育

私たちキリスト者は伝道するとともに、聖書をよく学ぶ必要があります。聖書を学ぶことによって知識を得、訓練され、すべてのよい働きのためにふさわしい十分に整えられた者となることができます。神のことばである聖書こそ、人々をキリスト・イエスに対する信仰による救いに至らせるのです（Ⅱテモ三・一五）。聖靈は聖書を用いて人の心に働かれます。ですから、信徒はみことばの学びを決しておろそかにしてはなりません。

信徒教育の形態は教会によって多少の違いがあります。ある教会では、教会学校の成人科や聖書研究会において、またある教会では、信徒聖書学校を開設するなどによって信徒教育が行なわれています。信徒に対する聖書教育は知的な学びに終わるものではなく、実生活に適用され、訓練され、整えられて奉仕の実を結ぶものでなければなりません。

教会は信徒に、伝道とともに聖書教育の場と機会とを提供しています。聖書教育という時、聖書そのものを学ぶとともに聖書の教理、聖書の概観、聖書解釈学なども学ぶ必要があります。聖書の教理とは、神、人間、キリスト、救いなどのテーマについて、聖書が何を教えているかを学ぶもので、聖書の概観とは、聖書各巻のつながりや内容、聖書全体の主題などを学ぶものです。

また、聖書解釈学とは聖書解釈の原則を学ぶもので、これが無視されると聖書を曲解することになります。

更に、各自の賜物によって奉仕の分野が異なりますから、オルガニストならば教会音楽についてよく学ぶというように学科を選択するのもよいことです。聖書教育が充実すると、教会の中から聖書をよく説き明かし、伝道できる信徒が起これされて教会の成長につながります。

### 3 献身者教育

教会は主の宣教の大命令を遂行するために、よく伝道し、よく教えることのできる人を必要としています。このために主は、ある人を伝道者、牧師また教師として召されました（エペ四・一）。ここで言う献身者は、この主の召しに応答し、フルタイムで主の働きに携わることを決意して、主の訓練に身をまかせている人のことです。

教会は献身者が練達した働き人になるように、十分に聖書教育、神学教育、伝道の実際的訓練が受けられるように、配慮しなければなりません。普通、献身者は推薦される神学校に入つて学びます。神学校に行かないでも他の方法で学びつつ、宣教活動をする人もありますので、牧師、伝道師になるために必ずしも神学校に行かなければならぬということはありません。いずれにしても献身者は、聖書と、その神学をよく学ぶ必要があります。神学校に学ぶ間は、アルバイトをして学びに支障をきたさないようにし、学びと共に、祈りの生活を確立することが大切です。

献身者教育と関連して、考えねばならないことは、教会と神学校の関係です。神学校は各専門の教師を必要としており、学校の管理、運営面でも、人的、経済的必要を覚えているのが現状で

す。こうした現状を考える時、教会が神学校に対しても無関心であつてよいはずはありません。教会は神学校の現状を、神学校は教会の必要をよく知つて、共に福音宣教と神学教育を推進していくならば、すばらしい主の働き人が養成され、宣教活動も一層前進することでしょう。

## 第二章 キリスト者の個人生活

キリスト者生活には、教会生活という領域とともに個人生活、家庭生活、社会生活などの領域があります。これらのものは密接に関連し、互いに支え合う関係にあります。個人生活の充実なくして教会生活の充実もありませんし、その逆もまたしかりという具合です。ここでは、キリスト者の個人的領域における信仰者としての生活について学びます。

### 一、個人とは

聖書は、人間は自分の意志によって神に応答し、神に仕える主体性を持つた個人として造られたことを教えています。キリスト者は、聖霊の助けと導きによって、自分の意志による決断や選択によって、積極的に神に応答し、神に仕え、神の栄光を現わす個人としてこの世に生かされています（Iペテ二・五）。

## 二、個人生活の目的

使命を与えられている教会の一員として、個人的領域における生活を神に喜ばれるように築き上げ、確立することは、私たちの当然の責任です。従って、キリスト者の個人生活は、周囲から遊離して個人の世界に閉じこもり、個人だけの楽しみや幸福を追求するものではありません。私たちの個人生活の目的は、個人的領域にある事柄を主のみこころに従つて整えることによって、神の栄光を現わすことです。それは、キリストの恵みを隣人にあかしする生活となります。すなわち、自分に対する神のみこころを第一に求めて従い、教会の一員として、教会が「地の塙」「世界の光」としての役割を果たし、福音宣教の働きを推進することに加わることです。また、教会の交わりを豊かにすることにもあずかることです。

### 三、個人生活の三つの領域

キリスト者各個人は、与えられている使命と目的に従つて、常に主の弟子として自己訓練しなければなりません。これには少なくとも三つの領域があります。

#### 1 神に対して

キリスト者は神との関係において一つのことを心がけます。

まず第一は、自分に対する神のみこころを知ることです。私たちの個人生活は、この世の思想、風潮に取り囲まれています。この世の流れに流されて自己中心的な判断や好みによって生活する誘惑はいつもあります。しかし、私たちは、主のみこころは何か、何が主に喜ばれる生活かを聖書から教えられ、神のみこころを最優先する生活を築かなければなりません（ロマ一

#### 二・一、二二）。

第二は、神のみこころに従うことです。みこころを知つても、従わないなら意味がありません。神を畏れる生活とは、実生活において神に従つて生きることです。神は私たちがみこころに服従することを何よりも喜ばれます。

そのために、今の時代に対する世界的な主のみこころは何かを知る必要があります。この時代における主のみこころの中心は、福音を全世界に伝え、キリストの教会を建て上げることです（マタ二八・一九、二〇）。この大きな主のみこころを枠組みとして個人生活を営むことは、まさに主のみこころにかなうことです。そして主は、宣教と教会を建て上げるというみこころを枠組みとして、私たちの個人的な日常生活の領域におけるみこころをも明らかにしてくださいます。

#### 2 隣人に対して

これについては、家庭生活、社会生活の項で具体的に扱います。ここでは、隣人に対する基本的な態度について述べておきます。未信者に対しては、救われるべき尊い人格として接するよう心がけましょう。特に、仕えるという姿勢をもつて接することが大切です。また、主にある兄弟姉妹に対しては、「キリストが代わりに死んでくださったほどの人」（ロマ一四・一五）として仕え、互いの靈的成長に役立つことを求め、互いの重荷を負い合い、福音のあかし人として励まし合うように心がけましょう。どちらの場合でも、みことばの標準をしつかり保つことが大切です。

### 3 自分に対する対応

私たちには、神のかたちに造られており、キリストの救いによって神の子どもとされ、神に愛されている者です。ですから、正しく自分自身を尊重することを学ばなければなりません。聖書の隣人愛の戒めの中には、「どの個所にも「自分と同じように」（マタニニ・三九）ということばがついています。正しく自分を愛し、大目にすることは主のみこころです。自分を軽蔑したり、責めたり、卑めたり、人と比較して劣等意識を持ったり、粗末に扱ったり、傷つけたり、自殺したりすることは、私たちをありのまま愛し、受け入れておられる愛の神に対する反抗であり、罪です。私たちは、神が私たちを見ておられるように自分を見、神が私たちを受け入れてくださっているように、自分を受け入れる自己受容の心を身につけたいものです。これは私たちの精神生活に安らぎをもたらします。そして、御靈の助けによって、私たちの個人生活が聖さ、自制心、勤勉、節制、愛、質素、あかしと奉仕などの実によって飾られることを祈り求めなければなりません。しかし、私たちの自己中心的肉の性質は、私たちがこれらの実を結ぶのを邪魔します。しかし、聖書は、キリスト者は既にこの肉の性質をキリストと共に十字架につけた者であると述べています（ガラニ・二〇）。私たちは、このみことばの事実を信仰によって受け入れて、自分の肉の性質としての自我を、既に死んだ者とみなさなければなりません（ヘロマ六・一一）。今、キリストにある新しい「あなた」が生きているのです。このように考え、生きることが実を結ぶ個人生活に不可欠です。

## 四、個人生活の確立のために

キリスト者の個人生活は、右の三つの領域で確立されなければなりません。私たちの個人生活がこれらの領域で訓練され、実際的に確立されるためには、聖書を読むこと、祈ること、教会の集会を守ること、そして、実際生活において明確な方針を持つて生きることが求められます。

### 1 聖書を読む生活

聖書は神の靈感によって書かれた神のことばであり、私たちの信仰と生活を導く唯一絶対の規範です（エテモニ・一六、一七）。私たちは聖書を読むことによって神のみこころを深く知り、神への信頼と愛が養われ、地上における良いわざのために備えられ、この世と妥協しない聖い生涯を全うできるのです。

#### ①聖書を読む基本的態度

聖書は神のことばですから、祈りつつ、神のみ声を聴くという態度で読むことが必要です。また、御靈によって靈感された書ですから、御靈の照明、導きを期待して読むべきです。不敬虔な態度や、みことばを冗談に用いることなどは慎まなければなりません。みことばは、謙虚で、かつ真剣な態度をもって祈り深く読まれるべきものです。

#### ②毎日規則正しく読む

日々の必要な靈的糧は、毎日聖書からいただくものです。イスラエルの民は荒野で天からのマナを何日分もたくわえることができませんでした。マナは朝ごとに毎日集められなければならなかつたのです。私たちにとってみことばも同様です。

また、一年に一回、聖書を通読する目標を持つことは有益です。新約は一日に一章、旧約は一日に三章読めば一年間で聖書を読み終えることができます。

### (3) 理想的な聖書の読み方

聖書の理想的な読み方は、一つの書を読み始めたらその書の最後までを一まとめてとして読み終えることです。昨日はイザヤ書、今日は黙示録、明日は使徒の働きというように、読む個所が毎日田まぐるしく変化するのはよくありません。

また、時々、日々の日課としている分量を越えて、一日のうちにたくさん読みたくなることがあります。その時は、多くの分量を読んでください。また、時には、ある書を全部一気に読むことがあつてもよいでしょう。

毎日聖書を読む時は、御靈の助けを求めて読んでください。読んだみことばを祈りのうちに瞑想することは、大きな益をもたらします。また、私たちは忘れやすい者ですから、教えられたこと、気づかされたことをノートに短く書き留める習慣をぜひ身につけたいものです。そのノートは後日、必ず役立ちます。

### (4) 聖書を読む助けとなるもの

聖書通読を二日坊主に終わらせないためには、規則的に聖書を読む助けとなる聖書通読表などを利用して読むことも有益です。また、解説つきで聖書通読を助ける「みことばの光」なども助けとなります。

聖書は断片の寄せ集めからなる書物ではなく、キリストによる救いを主題として書かれた、一貫性と統一性のある書物です。ですから、断片的な理解ではなく、創世記から黙示録まで

を、神の救いの始まり、展開、成就の歴史として把握することができるよう学んでください。

聖書の学びのためには、聖書概論、聖書辞典、聖書語句辞典、聖書ハンドブック、聖書地図、聖書注解書なども役立ちます。「これらの参考書は、牧師と相談して何冊か揃えておくと、個人の聖書の学びが楽しくなります。

### (5) 聖書のみを多く読もう

聖書の理解を助ける有益な注解書、参考書、また、信仰を励ます伝記、説教集、あかし集などの信仰書がたくさんあつても、聖書そのものの力と価値に匹敵するものはありません。

ですから、何よりも聖書そのものを読み、理解するよう努めましょう。中には、信仰書はたくさん読むが聖書そのものに親しもうとしない人がいます。聖書よりも信仰書のほうが面白く読みやすいからでしょうか。しかし、どんなに益をもたらす信仰書であつても、決して聖書の代用になりえないことを覚え、聖書を読むことを何よりも優先させてください。

### (6) 聖書に従おう

聖書を読んで教えられて感動するだけでなく、教えられたことに従うことが大切です。主は、みことばを聞いてそれを行なう人を、「岩の上に家を建てた賢い人にたとえられました（マタ七・一四）。その人の家は、嵐が来てもびくともしませんでした。ヤコブは、「みことばを実行する人になりなさい」（ヤコ一・一一）と勧め、「行ないのない信仰は、死んでいる」（同一・一六）と言っています。

みことばに服従しようとすると、様々な戦いや困難が生じることがあります。神はご自身

に従う人を助け守つてくださる真実な方です。みことばに従う人は、聖書の素晴らしさを更に知り、生ける神の力と真実を体験し、岩のような不動の信仰を持つようになります。その人は、人生の激しい試練に直面しても動搖せず、「圧倒的な勝利者」（ロマ八・三七）となるのです。

## 2 祈りの生活

キリスト者にとって、祈りは生ける神との交わりに欠くことのできない手段です。これによつて初めて、確信に満ちた生き生きとした生活ができるのです。もし、祈りがなくなつたり、少なくなつたら、新生したキリスト者であつても、その生活は機械的になつてしまひます。キリストが地上生活の間、常に生き生きと活動された秘訣は祈りでした（マル一・三五、ルカ五六、六・一二、マタ一四・一三）。また、実に力強い伝道をした使徒パウロも祈りの人でした。彼は、各教会の信徒のために常に祈り、忙しい伝道の合間にも主との交わりを欠かしませんでした（使徒二〇・一三、ピリ一・三・四、コロ一・三）。

### ① 祈りのあり方

#### ① 祈りの場と祈る時間

祈りは神との密接な交わりですから、神と自分だけになれる奥まつた部屋「密室」を確保しましよう（マタ六・六）。祈りには、聞くことと語ることの二面があります。何者にも妨げられずにみ声を聞き分け、心から正直に祈るためにには、「密室」が必要です。そのためには、祈りの時間も関係してきます。朝できるだけ早く、少なくとも三〇分は取れるよにとどまり、祈り心を持って生活することが大切です。

うにしたいものです。できる限り夜にも時間を取り、朝は礼拝を中心としてその日の必要なために祈り、夜は一日の感謝や反省を中心にして、その日に出会った人々のためにとりなしの祈りをするとよいでしょう。このような一定の静思の時以外にも、一日中、主のみ前にとどまり、祈り心を持って生活することが大切です。

② 「ま」ところをもつて祈ること  
ヘブル人への手紙一〇章二二節に、「全き信仰をもつて、真心から神に近づこうではありますませんか」とあります。神は真実な信仰の祈りを、喜んで聞いてくださいます。

#### ③ 信仰をもつて祈ること

ヤコブの手紙一章六・七節に、「ただし、少しも疑わずに、信じて願いなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。そういう人は、主から何かをいただけると思つてはなりません」とあります。主イエスも、「あなたがたが信じて祈り求めるものなら、何でも与えられます」（マタ二二・一一）と言われました。

#### ④ 忍耐をもつて祈ること

主は不正な裁判官のたとえ（ルカ一八・一～七）をもつて、「いつでも祈るべきであり、失望してはならない」とを教えられました。真夜中に三つのパンを求める友のたとえ（ルカ一一・五・一三）も、祈りが聞かれるには、いかに忍耐と執拗さが必要であるかを教えています。私たちは求め、尋ね、そうして門が開かれるまで叩き続けなければなりません。神は必ず全能のみ手を動かして豊かに答えを与えてくださいます。

## ② 祈りの内容

マタイ六章九～一二節に、いわゆる「主の祈り」と言われる模範的な祈りが記されています。これは主が、「だからこう祈りなさい」と言つて教えられたものです。これを見ますと、最初に礼拝、次に実際的な必要、靈的な必要、靈の戦い、最後にまた礼拝、特に賛美になっています。私たちもこれを参考にして、祈りの内容を高められ、深められましょう。他に、詩篇にも、多くの模範的な祈りがあります。

#### ①賛 美

祈りを始める時に主をほめたたえることは、神の民にふさわしいことです。

#### ②感 謝

まず主の贍いの恵みを感謝し、靈的、物質的祝福や健康、また友人や社会や国に与えられた神の恵みに対して感謝を述べるようにしましょう。

#### ③罪の告白

告白とは、自分の罪を認め、神に言い表わす行為です。それは、悔い改めに必要な第一歩です。聖靈は、聖い器を通してもつともよく働かれます。詩篇五一篇にあるダビデの告白などを参考にし、日々聖められるために、祈りの中で告白の時を十分に持ちましょう（ヨハ二・九参照）。

#### ④願 い

願いとは、自分の個人的必要を神に訴えることです。主イエスは、盲人に向かつて「わたしに何をしてほしいのか」（マル一〇・五一）と、自分の願いを口に出して言つことを求められました。みことばに「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願

いを聞いてくださること」と、これこそ神に対する私たちの確信です」（ヨハ五・一四）とあります。

#### ⑤とりなしの祈り

とりなしの祈りとは、他の人のためにささげる祈りです。それはその人の立場に立つて、その人の眞の益のために全能の神に祈る祈りで、未信者の家族、親族、学校や職場の友、近隣の人々のためにも、主にある兄弟姉妹、教会学校の教師、教会役員、牧師、宣教師のためにもささげることができます。それはキリストと共に、全能の神と人との間に立て、救いのために、また、サタンの攻撃や誘惑からの守りのために、主の働き人が有能なみことばの役者となるために祈ることです。どうか、人々の救いのために祈ると同時に、あなたの牧師、宣教師のために祈ってください。使徒パウロもしばしば、とりなしの祈りを求めています（エペ六・一九～二〇、ヨハ二・一）。

このほか、政治家、教育者など、大きな影響力を持つ人々のためにも祈りましょう（ヨハ二・一）。

とりなしの祈りは、思いつきや、ひらめきに任されますと散発的になつたり、忘れたりしやすくなります。祈る人の名前や項目を書き込んでおく祈祷カードかノートを作ることが大切です。

#### ③祈りの答え

キリストは、祈りについて教えられた時、いつも答えを期待するように教えられました。しかし、答えられる祈りには、おのずから条件があります。まず、心にいだく罪を告白し（詩篇

六六・一八）、信仰によつて（マル一一・一二）、みこころに従つて（ヨハ五・一四）、ただ神の栄光を求めてキリストにとどまり（ヨハ一五・七）、その御名によつて（ヨハ一四・一三・一四）祈ることです。

間違つた祈りには答えはありません（ヤコ四・三）。しかし、御靈は私たちを正しく導いてくださるので、主を信頼して祈り続けましょう（ヨハ一四・二六）。

### 3 集会を守る生活

#### ① 諸集会に出席する恵み

キリストの血によつて贖われ、一つとされた選びの民が、神の「臨在を仰いで開く教会の集会に、神は豊かな恵みを与えてくださいます。

ペンテコステの時にも、集まつていた人々の上に聖靈が下り、ペテロのメッセージを聞いていた人々が救われ、キリスト者の集いを通して主の臨在の力が現わされました。キリストのからである教会を建て上げるために互いに共通の真理を悟り、キリストに対する正しい理解と体験を共に深めてゆきましょう。特に、礼拝と祈祷会には、優先的に、忠実に出席いたしましょう。

#### ② 個人的な生活設計

集会出席のために、日常生活の生活設計をきちんと立てましょう。キリスト者は、信仰を持つ時にすぐ、一週間のスケジュールを取り扱われる必要があります。この生活設計があつて初めて、忠実な集会出席と力強い信仰生活ができるのです。まず、「神の国とその義」とを第

一にして、個人礼拝や集会出席、伝道活動の時間を確保しましょう。それから仕事、休養や交際やリクレーションなどのスケジュールを取り扱われる必要があります。

最後に、言うまでもないことですが、主にある共同体としての連帯性を築き上げていくためには、自分の所属教会の集会を、まず中心としましょう。

### 4 あかしの生活（キリスト者の実際生活上の注意事項）

キリスト者の生活は、全部があかしの生活です。その目的は、聖靈の力によつてキリスト「自身の素晴らしいさを現わすこと」です（使徒一・八）。ですから、誰から私たちの信仰について聞かれたら、いつでも弁明のできる用意をするだけでなく（イペテ三・一五）、「ことばにも、態度にも、愛にも、信仰にも、純潔にも」信者の模範となるようにするべきです（イテモ四・一二）。

#### ① ことばによるあかし

まず、聖書から福音についてよく学び、それをよく把握していなければなりません。キリスト者なら誰でも、これを常に心がけつあかしすることができます。

このあかしを一番しやすい場所は集会です。集会後、人の心はみことばによつて導かれています。ですから集会に出る時には、自分が祝されることと同時に、福音が必要とする人、励ましを必要とする人がいることを期待して備えましょう。

また家族のためにも、はつきりと福音を伝える機会が与えられるように祈りましょう。そして、人生の根本問題について家族と心を通じ合えるように備えましょう。なるべく家族があな

たの入信に驚きの目を向けている間に、教会で祈つてもらつてあかしをしましよう。また、学校や職場の友人や同僚、知人や近隣の人々に対しても重荷を持つべきです。キリスト者は、そこへ遣わされた証人なのです。その一人一人に深い関心と理解を持とうではありませんか。

## ②生活態度によるあかし

キリスト者の生活態度の基本は、神に対し、人に対する筋の通った生活をすることです。この世では「肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢」（ヨハ二・一六）を満たしてくれるものに価値が置かれていますが、私たちは主にあって、主を畏れ、愛することを第一として成長していく内なる人に価値を置いています。主が、マタイ五章三～九節で、幸いの条件としてあげられたものはみな、新生の結果、成長してくる性格であり、これがあかしの生活の基礎なのです。既に考えた聖書を読む生活、祈りの生活、集会を守る生活は、この性格が育て上げられるために極めて大切なのです。そこで、実際生活の中でこのことがどのようにかかわっていくかを絶えず考慮しなければなりません。

### ③からだの節制

からだは聖霊の宮ですから（コリ六・一九）、不節制によって弱めたり、無意味な危険にさらしたりしないように注意し、適度な運動などを心がけて健康を保ち、からだをもって主の栄光を現わせるようにしましょう。もともとからだは、神によって造られた驚異的なもので、決して粗末にしてはならないものです。靈は尊いけれども、からだは弱く、卑しいものだという考え方にはならないものです。靈は尊いけれども、からだは弱く、卑しいものだといふ考え方には、神のみわざをそるものです。からだの益もまた、測り知れません。

しかし、病気になつたり、けがをしたりした時は、まず主のみ手に委ね、主のいやしを待つ

と共に、必要な治療を受けることが大切です。また、病床はしばしば、健康な時には気づかなかつた、隠れた戒めや恵みを与える場ですから、失望することなく、自らを点検し、主を仰ぎ、み教えを期待しましょう。また、牧師や教会の役員を招いて祈つてもらうことも大切です（ヤコ五・一四～一五）。

### ④異性との交際

これは、少年期、青年期、壮年期、老年期でいろいろな違いがありますが、これに失敗した人々の例（聖書中ではサムソンやダビデ等、現代社会の多くの例等）を考えて、良識を働かせ、誤解を招いたり、誘惑に陥つたりしないように、公明正大であるべきです（テモ五・二）。また、罪の巧妙な働きをよくわきまえ（ロマ七・八、一三）、決して油断するべきではありません。

しかし、神は、人を男と女とに造り、それぞれ異なる賜物を与えておられます。聖い交わりを通して与えられる恵みは極めて大きなものです。特に、結婚前の青年期には、異性との聖い交わりを通して自分を知り、眞実な愛や信頼、誠実などを学び、誘惑や不安との戦い、様々な熟慮などを通して信仰を貫くことを教えられ、キリスト者としての強い性格が形成されてゆくのです。消極的な面から、偽りの愛や、醜い自我の姿も教えられますが、それも大切なことです。

ですから、キリスト者は、神と人との前で、異性との交わりを聖く保ち、互いの徳を高め合つてゆきたいと思います。

### ⑤ことば

「とばには非常な力があります。特に、人を評価することばはそうです。」とばの有用性は測り知れませんが、それゆえに注意して用いないと大きな害を及ぼします。ヤコブ三章一～二節にはそのことが書かれています。キリストをあかしし、その教会を建て上げていく上で、そしりや悪口や陰口、軽々しい批評やうわさ話、不平不満の苦々しいことばやつぶやきが、どれだけ大きな破壊的影響力を持っているかわかりません。むしろいつも、「詩と賛美と靈の歌とをもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しましょう」（エペ五・一九）。語るならばキリストを語り、みことばに基づいて語り、教会の徳を高めることを語りましょう。欠点のある人のためには祈りましょう。

## ⑤金 錢

Iテモテ六章九～一〇節にあるように、金銭そのものは悪ではありませんが、それを愛する心が、「誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲」に陥らせ、信仰から迷い出させ、「非常な苦痛をもつて」人を刺し通すのです。ですから、万物を造り支配される方を信じる者にふさわしく、そのような欲に支配されることなく、正しく金銭を支配する者でなければなりません。キリスト者は、金銭を多く与えられても少なく与えられても、神から委ねられたものとして、それを管理する立場に立つのです。神は、忠実な管理者には常に多くのものを委ねられます。金銭の取り扱いについては、神と人との前に公明正大であるべきです。

## ⑥趣味・娛樂

いつも張りきつた弓は、使おうとする時には役に立ちません。同様に、いつも緊張して働き

づめでは効果的な働きをすることができません。弓に緩める時が必要であるように、キリスト者にも肉体的・精神的休養が必要です（マル六・三一）。ですから、そのために適度な趣味や娯楽を楽しみ、再び新たにされることは極めて健全です。

## ⑦酒・たばこ

聖霊の宮であるからだを汚し、損なうようなものは、キリスト者にふさわしくありません。酒はまた、しばしば人の判断力を狂わせ、誘惑に対しても人を弱くします。これらのものを避けた方がよいことは明らかです。

## ⑧時間の管理

既に②個人的な生活設計の項で言及しましたが、一週間のスケジュールをよく考えて、時間を主のために生かしましょう（コロサイ四・五）。また、ほかの人の時間を生かすことにも注意すべきです。約束の時間に遅れたりすることは、人の時間を盗むことになります。自分の都合で、会議や集会に遅れることも人の時間を無駄にすることになります。やむをえず遅れる場合には、早めに連絡するように心がけましょう。

他にも、いろいろな場合がありますが、神と人との前で、キリストの証人として立つにふさわしく行動しましょう。

## 一、家庭の形成

家庭は神が私たちに祝福を与えるために備えられた最も基本的な生活の場です。ですから私たちは、神の祝福を十分に味わえるような家庭を築いてゆかなければなりません。

### 1 結婚

結婚は人間の願いや社会に必要なものとして、人の手によつて定められたしきたりや決まりではありません。それは、神が人を男と女に創造されて以来、人に祝福を与えるために定められた神の厳かな秩序なのです。したがつて、自分の好みや計画などを中心に結婚を考えるのは誤りです。神のみ前で、自分の結婚についての目的や動機などが、神に喜ばれるものであるかどうかを吟味することが大切です。また、神が定められた結婚は一夫一妻による公的なものであり、私的なひそかな男女の結合や浮氣などは、神が定められた秩序に反するもので、神からの祝福を受けることはできません。

#### ①結婚の目的

①それは、一人の男と一人の女が一体となることです。「それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである」（創世二・二四）。もはや二人ではなく、精神的にも肉体的にも一つとなるのです。「創造者は、初めから人を男と女に造つて、『それゆえ、人はその父と母を離れて、その妻と結ばれ、ふたりの者が一心同体になるの

だ。』と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません」（マタ一九・四～六）。

②次に、その男女が、互いによき助け手、配偶者となることです。「人が、ひとりでいるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう」（創世二・一八）。そこには愛と服従が要求されます（エペ五・二二～二三参照）。

③そしてそれは、「生めよ、ふえよ、地を満たせ」（創世一・二八）、つまり子孫を残すことです。これは、神の祝福に満ちた聖なる委託です。

#### ②結婚の備え

結婚を通して、正しく神の祝福にあずかり、より良く神に仕える家庭を築くためには、良い備えが必要です。特にフリー・セックスなどと云つて結婚が軽んじられる今日の社会風潮の中で、私たちは、「結婚がすべての人々に尊ばれるようにしなさい。寝床を汚してはいけません。なぜなら、神は不品行な者と姦淫を行なう者とをさばかれるからです」（ヘブ一二・四）のみことばを心に銘記すべきです。

#### ③祈りによる備え

結婚はまず、聖書の約束に信頼した祈りにおいて始められるべきです。  
「わたしはあなたがたのために立てる計画をよく知っているからだ。——主の御告げ。——それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ」（エレ一九・一一）。

祈りのうちに自分の結婚についての目的や動機が吟味され、結婚の相手について具体的に考え始める時に、あらゆる問題の中でキリスト者としての正しい判断が下せるよう備えることが大切です。そのための祈りに決して早過ぎることはありません。

#### (4) 配偶者の選択

具体的に結婚相手を選ぶとき、基準となる最も大切なことは、聖書が明らかにしている通り、お互いが信仰の告白をしているキリスト者であるということです（エペ五・二二～三三、一コリ七・三九、一コリ六・一四～一六参照）。

未信者を相手に選ぶということは、他にどのような点で好感を覚え、諸条件を満たしていくのも、人生の目的、家庭の目的、価値観など一致が得られないことであり、そのような二人は一心同体としての夫婦にはなり得ませんし、ひとりでいるよりもより良く神に仕える生活を築くことなど不可能です。

キリスト者同士であるべきという結婚の基準を無視したり、軽視して相手を選んだりすることは、どんな理由があるにせよ神の祝福の秩序を自ら拒んだことであって、その不従順の苦い実を生涯、自分の責任において刈り取ることになります。神からの祝福は、神の定められた秩序の中においてのみ、私たちに約束されているのです。

相手を見い出すための具体的な可能性はいろいろあるでしょうが、家人などのすすめる未信者のお見合い相手や、教会外で知り合った相手の場合は、自分を今の自分にしてくださったキリストを伝え、相手も同じ信仰を持つように努力することが大切です。その結果、相手が教会に導かれ、礼拝に集い、やがて信仰告白からバプテスマへと導かれていくならば、その相手と一緒に男女の数が合わないとか、年齢や周囲の状況などに心を乱されてしまわないように、みことばに信頼して、主が与えてくださる相手を忍耐して待ちましょう。

また、自分で祈ると同時に牧師にも相談し、祈りの指導を求めるることは大切です。その時、結婚斡旋書や写真を手渡しておくことも良いでしょう。相手の紹介を依頼する場合は、判断の資料となる希望や考慮しなければならない事柄をあらかじめ伝えておいて、信頼を持って委ねることが大切です。

相手に理想を期待するあまりに、わがままに陥らないように注意しましょう。未完成のお互いが、一つとされることによって協力し、家庭の形成を通して完成を目指すのだという謙虚な姿勢が必要です。また、結婚斡旋書などによって相手を知るときは、特に外面的なことを判断のすべてとしないよう注意することが大切です。

「麗しさはいつわり。美しさはむなしい。しかし、主を恐れる女はほめたたえられる」（箴言三一・三〇）。

#### (5) 文 際

恋愛中や結婚を前提とした交際においては、どうしても自分たちのこと以外は考えられなくなりやすいので、いつも一人が祈りを共にして整えられ、自分たちの喜びであり楽しみである

交際が、主の悲しみや嘆きの材料にならないように、お互に注意が必要です。一人の個人的な交際が、教会全体の雰囲気や活動にいつも明るさと励ましを加えるようなものであるよう配慮し、一人の喜びが全体の喜びとなり、祝福を受けることができるようなものにします。

また、神と教会との前で慎み深く聖い交わりをなし、一般に言われる婚前交渉などの世俗的悪習に誘惑されないように注意しましょう。性は神が祝福を与えるために人に備えられたものですが、結婚という神の定められた秩序の中でのみ祝福をもたらすものです。未婚、既婚を問わず、結婚という秩序からはずれた性関係は、どんなものも罪です。

お互いがそれぞれの諸条件を満たし、お互いを主が与えてくださった伴侶となるべき者であるとの確信が得られた時は、すみやかに牧師に報告し、最も良い時期に婚約式をして、神と教会との前に結婚の約束を明らかにするとともに、結婚への準備を始めることが大切です。

**(6) 婚 約**  
婚約は、主にある男女が、互いに主が備えてくださった生涯の伴侶であるとの確信が与えられ、将来、適当な時に結婚しようとする志を明らかにするものです。

婚約はあくまでも結婚の約束であつて、結婚と混同してはなりません。婚約中の二人は、神と教会との前に交わりを聖く保ち、他人につまずきを与えるような言動を慎み、一人の喜びや交わりが、周囲の喜びとなり、徳を高めるものとなるように配慮しつつ、愛と理解を深めて、家庭を通して神の祝福を得、より良く神に仕えることができるよう、物心両面における準備をしましよう。

これらの結婚の準備や挙式に関しては、キリスト者としての正しい判断が下せるように、牧師とよく相談し、その指導を受けることが必要です。また、信仰の先輩たちにも祈つてもらい助言を受けることも良いことです。

#### ⑥ 結婚式

結婚式を挙げる前に、必ず牧師に相談し、結婚カウンセリングを受けて、靈的、精神的、肉体的なあらゆる準備を十分にするようにしましょう。あまり式にばかり気を取られて、結婚そのものの本来の意味を見失うことのないようになります。

結婚式は、神と教会との前で結婚の誓約を交すためのものです。式は教会堂で挙げなければならぬということはありませんが、式を通して家族や知人たちに信仰の生きたあかしができますから、十分な配慮の上で、目的にかなつた式を挙げることができるように、日時、場所、方法などを決めましょう。また、できるだけ多くの主にある兄弟姉妹に出席していただき、祝福していただけるようにしましょう。

結婚式を挙げるにあたっては、戸籍上の手続きを正しく済ませるようにしましょう。

披露宴は必ずしなければならないとというものではありませんから、あまり無理をしてぜいたくにならないように心がけ、意味のあるものにしなければなりません。むしろ、神への感謝献金とか教会への記念の献品とかが意義のあることでしょう。

結婚はすべての人があるわけではありません。独身で一生を過ごすように定められて

いる人もあり、また、余念なく主に仕えるために独身の道を選ぶ人もあります。

「というのは、母の胎内から、そのように生まれついた独身者がいます。また、人から独身者にさせられた者もいます。また、天の御国のために、自分から独身者になつた者もいるからです。それができる者はそれを受け入れなさい」（マタ一九・一二）。

### 3 再 婚

再婚について、聖書は次のように語っています。「妻は夫が生きている間は夫に縛られています。しかし、もし夫が死んだなら、自分の願う人と結婚する自由があります。ただ主にありますのみ、そうなのです」（Iコリ七・三九）。

すなわち、配偶者と死別した人については、再婚を認めているのです。聖書の中に登場する信仰者ルツも夫と死別し、その後、再婚をしました。

しかし、離婚した男女が再婚するのは禁じており、和解するように勧めています。「もし別れたのだったら、結婚せずにいるか、それとも夫と和解するか、どちらかにしなさい」（Iコリ七・一一）。

### 4 やもめとしての生活

聖書は、望みを神において、昼も夜も、絶えず神に願いと祈りをささげているやもめの生き方について語っています（Iテモ五・三～四参照）。やもめの生活には、伴侶を失つたさびしさの他に、生活の安定、子どもの養育、生涯に関する決断など、様々な問題があります。そ

のような時にも、望みを神において、祈りつつ歩んでゆきましょう。また、聖書は、自活できない時には、その子どもや孫などの親族がその世話をするように勧めています（Iテモ五・四、八）し、若いやもめには結婚するように勧めています（Iテモ五・一四）。

再婚のように、生涯の決断を迫られるときは、牧師などに相談し、祈りと良い助言を受けるようにしましょう。

### 5 離 婚

最近はいつも簡単に離婚する風潮が高まっていますが、聖書は離婚を禁じています。「次にすでに結婚した人々に命じます。命じるのは、私ではなく主です。妻は夫と別れてはいけません。もし別れたのだったら、結婚せずにいるか、それとも夫と和解するか、どちらかにします。」また夫は妻を離別してはいけません」（Iコリ七・一〇～一一）。

聖書が例外として離婚を容認しているのは、相手が姦淫を犯した場合です。「しかし、わたしはあなたがたに言います。だれであっても、不貞以外の理由で妻を離別する者は、妻に姦淫を犯させるのです。また、だれでも、離別された女と結婚すれば、姦淫を犯すのです」（マタ五・三二）。しかし、このような場合でも、聖書は和解することを勧めているのです。

結婚生活では、すべてが順風満帆というわけにはいきません。しかし、様々な問題が生じた時にこそ、二人を結び合わせてくださった神と共に見上げ、祈り合い、正しい解決の方向に向かわせる努力をすることが大切です。

離婚は決して本当の解決にはなりません。信仰によってそれを乗り越え、相手を赦し、最終

的に神の栄光が現わされるようにしましよう。

「人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません」（マタ一九・六）。

## 二、家庭の相互関係

神は創造のみわざの完成として人を造られ、また「人が、ひとりでいるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう」（創世二・一八）と結婚制度を定め、家庭を創設してくださいました。

家庭は夫婦や親子など様々な人間関係によって構成されていますので、それらの人間関係の中にある神のみこころを知つて、家庭の相互関係を通して教えられ、成長させられ、神の栄光を現わすようにさせられたいものです。

### 1 夫婦のあり方

家庭の相互関係の中で、最も基本となるのは夫婦の関係です。人が「ふさわしい助け手」と共に生きることによつて、独善、高慢、孤独に陥ることから守られ、また、夫婦の交わりを通して真の愛を学ぶことができ、人間としての必要も満たされます。

夫は夫婦の代表者であつて、神に対して家庭の責任を負っています。家庭のあり方や子供たちの生き方についてなど、家庭の重要事については夫が判断し、決断する務めがあります。妻たは、夫が神のみ前でよくその務めを果たすための助け手であり、協力者です。「ふたりはひとりよりもまさつてゐる」（伝道四・九）のように、共に労苦し、助け合い、愛し合う夫婦の歩みには神の祝福が約束されています。

## 2 親のあり方

親は、子供に対して、神の権威の代行者として立てられています。親は、そのような自らの立場をよくわきまえて、まず自分自身を神のみ前で整える責任があります。子供は親のことばだけでなく、生活態度や生き方から学ぶものです。キリストの救いにあづかっているとはいへ私たちは、弱さや欠点を持っているので、親であつても、失敗した時には素直にそれを認め、神と人との赦しを求めるようにならしょう。そのように神のみ前に歩もうと努める親こそ子供の模範となるのです（詩篇一二七・三、申命六・四～九、エペ六・四）。

子供の救いのために祈ることは親の大切な務めです。また、子供が成長して進路の選択などに直面した時には、親の願いを押しつけたり、子供の言うままにするのではなく、親子で共に祈り、話し合い、主のみこころを見い出すように努めましょう。

高齢になると、肉体的・精神的・経済的に支えを必要とするのが普通で、子供に対して、それまでにはなかつた期待が出てきます。時々「私は子供の世話をならない。」という言葉を聞くことがあります、子供が自分の老いた親の世話をすることは聖書の教える家庭愛です（イテモ五・四～八）。

## 3 子供のあり方

「あなたの父と母を敬え」（出エ二〇・一一）と、神は十戒の中で親に対する子供のあり方

を教えておられます。子供が親を敬うことを通して、神への畏敬、従順さを身につけるようにとの神の期待が含まれています。子供が学校や社会に出るより前に、家庭の中で、従順さを学ぶことが大切で、それが人格形成の第一歩です。

子供が少しずつ成長して、信仰告白、バプテスマ、進路、就職、結婚相手の決定など、人生の重要な事柄に直面するようになつた場合には、子供は、それらについて親に相談するようになります。もし、親子で意見が異なつた場合は、忍耐をもつて話し合い、主のみこころを見い出すように努めましょう。

家庭の中では、ともすれば自己中心に陥り、わがままになりやすく、親や兄弟の心配の種になりがちです。家庭の中での自分の位置をよく自覚して、家庭の喜びや慰め、励ましとなりたいものです。主イエス・キリストは、その最も良い模範です（ルカ二・五二）。

#### 4 嫁と姑の関係

嫁と姑との関係が、複雑な問題を家庭の中に起こしやすいことはキリスト者にとっても変わりありませんが、キリスト者にとっては、キリストの愛を具体化する絶好の機会でもあります。ルツとナオミのような良い模範にならつて、互いに相手を受け入れ、尊敬し、助け合つて神に仕える家庭を形成させていただきましょう。

### 三、家庭礼拝

私たちは神第一の生活を送ることを告白した者ですから、まず最も基本的な生活の場である家庭

において、神第一の生活を実践するのは当然です。信仰生活が教会だけに限られたものとなるのは、私たちの陥りやすい危険であり、誤りです。

家庭の中に二人以上のキリスト者がいるなら、家庭礼拝を持つように努めましょう。

#### 1 その目的

家庭礼拝によって、夫婦、親子、兄弟、姉妹などが、主にあつて結ばれている者たちであることを確認することができます。また家庭礼拝を通して家族の様々な課題を共に祈り、ばらばらではなく、一致のある家庭を形成できるようになります。ノア、アブラハム、ヨシュアたちもみな、家族そろつて礼拝し、家族で神に仕えました（ヨシ二四・一五）。

#### 2 その実際

家族全員が集まれる時を家庭礼拝の時として定めます。朝食前か、夕食後が一般的には良いようです。決まつたプログラムなどはありませんが、主人かそれに代わる人が導いて、賛美、聖書朗読、祈りなどを組み合わせ、無理なく続けられる単純なものを工夫するといいでしよう。

子供が幼い時は子供を中心とした家庭礼拝を持つて、子供を信仰者として育て上げるようにします。子供が少し大きくなつてくると、全員そろう時間がなかなか取れなくなりますが、だれかが欠けても家庭礼拝を続けるようにすることが大切です。

家庭礼拝をささげる責任は、その家庭の主人にあります。妻は、そのために主人を助けるよ

うにします。

### 3 家庭礼拝の祝福

家庭礼拝を通して家族の交わりが深められます。親子の断絶、家庭の崩壊などが社会問題となっていますが、家庭礼拝が行なわれている家庭では親子兄弟の間での分かち合いや神のみ前での赦し合いが自然となってきます。そのためには、みことばによつて家族全員が教えられ、祈りによつて家族の諸問題を神のみ前に出し、各々が、キリスト者として成長し続けることが大切です。

このような祝福は、他に見られない程すばらしいものであり、今後の日本のキリスト教会の力ともなるべきものです。一朝一夕に家庭礼拝の祝福を見ることができなくとも、失敗を繰り返しつつ、長い年月にわたる努力を重ねながら、やがて豊かな祝福を味わえるように、互いに励まし合つて家庭礼拝を続けましょう。

### 四、家庭と伝道

家庭と伝道には二つの面があります。第一は未信者の家族への伝道です。家族伝道は大変困難なことです。しかし、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒一六・三一）の約束を信じ、家族の救いのために祈り続けましょう。人を救つてくださるのは神ですから、神への信仰を心の内に堅く持ち、ことばと生活態度のすべてを通してあかしの生活をしましょう。

第二は家庭を伝道の場としてささげることです。クリスチヤンホームの場合は、家庭集会を開催することを祈つてください。導かれたなら牧師と相談して日時を決めます。初めからあまり大きなことを考えないで、できることから手がけることが大切です。家庭集会には、信徒の交わりを中心にするものや、近所の人々へのあかしを中心とするものなどがありますが、家庭集会の大きな喜びは、救われる方やバプテスマを受ける方が起こされることです。

また、クリスマス会や家庭子供集会、教会学校の分校など、地域の必要に応じて伝道のために家庭を開放することなども有効な働きです。

### 五、家庭と教育

一般的に、教育の場は学校であると考えられていますが、聖書は、人間教育の中心的な場は家庭であると教えています（申命六・四～九）。信仰、美しい品性、良い習慣などは、子供が幼い時から親によつて教育されるものです。親の祈りや親との会話、交わりを通して生涯の土台が形成されてゆくのです。

また、教育の内容についても、一般的には、知識の習得すなわち知的教育偏重の傾向がありますが、聖書の教える教育内容は全人格的教育です。神によって創造された人間を信仰、品性、感性、健康など、様々な面から全体的に見て、それらすべてにおいてキリストに似た者に成長させられます（ヨハネ二・一八）、神の榮光を現わすことを目ざします。キリスト者である親は、この世の考え方には流されないで、いつも子供を全人格的に見るよう努めて、子供が神のみ前で成長してゆくよう見守る責任があります。

その中でも信仰教育が中心です。テモテのような純粹な信仰（Ⅱテモ一・五）は、全人格に良い影響を与えます。親には、子供の救いのために祈り、みことばによつて子供を育て、子供が個人的に神を信じ、神のみ前に自立できるように教育・指導する責任があります。また、教会学校への出席、礼拝への参加を励まし、学校のクラブ活動や塾がその妨害にならないよう導きましょう。幼い時から信仰教育をしっかりとおくことは、一生の宝を子供に与えることになります（箴言二三・六）。

## 六 家庭の諸問題

私たちは、家庭生活の中で誕生から死に至るまで、いろいろな出来事に直面します。それらには、ライフサイクルとして予想できるものとできないものとがあります。しかしいずれの場合でも、空の鳥や野の花さえ養い育てられる方（マタハ・一六・三〇）を信じて、建設的に対処してゆけるようにしたいと思います。神はご自身を愛する者たち、すなわち、ご計画によつて召された者たちのためには、すべてのことを働かせて益としてくださる方だからです（ロマハ・二八）。

### 1 出 産

家庭は、子供がいつ与えられるか、男の子か女の子か、健康か否か、どんな性格の子か、何人与えられるかなどによつて大きな影響を受けます。だから結婚する時と同様、子供を授かることについてもよく祈り、夫婦の事情や実情をよく考えて主に求めるべきです。特に神のご計画に従つて、神のお働きに役立つ者となる子供を祈り求める時、親としての心備えもできてくれる。

るのです。家庭にとつて、子供の誕生は、神のくださる最もすばらしい祝福の一つです（詩一二七・三）。

しかし、出産は、妻にとつては大きな負担になることですから、夫の特別な配慮といたわりが必要です。特に出産前後の一ヶ月余りは、「するべき」とが増えるため、信仰生活、特に教会生活が乱れがちになります。ですから夫は、教会生活を守ることに心を用い、妻の信仰を養う責任を果たすことにも心を用いるべきです。

また世間では、妊娠五ヶ月になると縁起をかついで、「戌の日」に腹帯をしたりします。主に信頼して祈つている私たちは、「戌の日」にござるべきではありません。このような異教の習慣を避けるために、また子供が授かるように、父なる神に祈つて備えることが大切です。もし必要なら、牧師を訪ねて出産までのすべてに祝福を求めて祈つてもらうといよいよう。

また、「家族計画」などの問題もありますが、それらについては、周囲の声に流されないようになります。そのためには、必要ならば、牧師に相談することをお勧めします。

### 2 獻兌式

これは信仰者の両親が、自分たちの信仰の告白として主のみ前に行なう式です。両親は、神の恵みによつて与えられた幼子を神にささげ、神より託された者として養い育てる」と誓約し、やがて幼子が成長して信仰を告白し、神に従う者となるように祈るのです。

聖書には、サムエルの母ハンナが幼子サムエルをささげた例（Iサム一・二〇、一八）や、

ヨセフとマリヤが幼子イエスをささげた例（ルカ二・二二、二四）などがあります。

献児式は、生後何日目と言ったまりのあるものではありませんが、出産後、夫婦がそろって礼拝に出席できる頃が適当で、牧師と相談して、日を決めて行ないます。その時には、それぞの両親や親族、友人にも出席してもらい、神について、信仰について理解を深めてもらうようにしましょう。

また夫婦のどちらかが未信者である場合、「幼児祝福式」として、祝福を祈つてもらうことができます。それは主のまわりにいた人々が、主に幼児の祝福を求めて来たことに習つたものです（マタ一九・一三～一五）。またそれは、夫婦揃つて主のみ前に出る機会ともなります。

### 3 子供のしつけ

キリスト者にとって、子供が主を信じ、愛し、畏れるように育てる」とは極めて大切です。そのため、子供が年齢によって違つた必要を持つことを謙虚に認め、その成長段階に応じて、調和のとれたからだと心と靈の成長と対人関係の必要を満たすようにしなければなりません（ルカ二・五二参照）。ですから、牧師に頼んで、そのようなことを学ぶ時を持つてもらうのが賢明です。その場合、同じような必要を持つてお母さんたちを誘つて（未信者でもよい）、いつしょに学ぶこともできます。

### 4 病気や事故

キリスト者は、神の子供として父なる神の恵みのもとにあり、その豊かなみ守りを受けてい

ますが、一方では、肉と世とサタンとの戦いの中にいます。ですから、思いがけないことにぶつかることがあるのです。特に、病気や事故にあうことがあります。その時には、いたずらにうろたえたり失望したりしないで、主のみ前に静まり、その原因や理由を冷静に考へるべきです。しかし、自分を責め過ぎて失望してしまわないように注意し、主の恵みの中にあることを覚え、正直に、客観的に検討することが大切です。そして、悔い改めるべきところは悔い改め、正すべきところは正し、心を再武装すべきです。ただ、「すべてのことを動かせて益としうださる」（ロマ八・二八）方を信じて立つのです。

しかし、実際に重い病気や事故にあった場合は、心が弱っている場合も多いので、牧師や役員を呼んで話しを聞いてもらい、祈つてもらうことも覚えておきましょう（ヤコ五・一三～一六参照）。

### 5 親離れ子離れ

今日私たちの国では、核家族化が進み、一人か二人の子供に親が世話を焼き過ぎるということが一般化しています。その結果、不安で親離れができないという青年や、心配で子供をひとり立ちさせることができないという親が増えています。そしてそれが、無氣力な青年を生み出し、様々悲劇を生み出しているのです。

私たちはまず、この予防を考えるべきです。神はすべての子供たちに、それぞれ独自の人格を与えておられますので、子供は幼い時から、それぞれにふさわしい、神と人とに対するあり方を求める事ができるのです。親は献児式の精神を生かし、もっと客観的な見方をして、そ

の年齢に応じて、子供のうちに備わっている潜在能力を育てるべきです。これには、いろいろな課題がありますが、それらはしつけの中に含まれます。そしてそれについては、どうしても学ぶ必要があることを覚えましょう。

万一、子供が無氣力になつた場合は、親は主に対する自分のあり方を深く顧み、信仰の姿勢を正し、主の恵みを求めてゆくべきです。そのためには、牧師のアドバイスが、助けとなるでしょう。

しかし、普通に子供が巣立つていく時にも、親にはさみしさが残ることもあります。夫婦ふたりだけになることもあります。そのことはあらかじめ覚悟し、むしろそれを喜べるように備えておきたいものです。

## 6 家庭と職業

一般の家庭では、家長が職業を持つことは当然のこととして受け入れられていますので、その変化には、家族をあげて対応する態勢ができています。しかし、転職や単身赴任の場合は、大きな影響を受けます。そのような時は、それをむしろ家族の絆を強める機会とすることがでありますように、建設的な方向に向けることが大切です。

子供の就職についても、一般には当然と考えられていますから、家族全員の理解を得ることはある程度です。ただその場合でも、職業の選択については、よく祈り、選択基準について考え、自分の価値観を修正されたりする過程を通ることは大切です。早くから主のみこころについて祈り求める」とを忘れてはなりません。

しかし、主婦が働くとなると、家庭には大きな変化が起ります。今日、婦人の社会的貢献という考え方も明確化しつつあり、婦人の社会進出も顕著になりつつあります。そして働く主婦も増えています。しかし、そこには、仕事と主婦の役割とを両立させるという課題があることを見落としてはなりません。ですから、主婦が職業を持つ場合は、家族全員がお互いのことを配慮し合い、ゆとりやくつろぎや家庭の団欒が貧しくならないように、家事は分担するというような態勢を築いてゆかねばなりません。このような態勢を作り上げるのには時間がかかりますので、それまでに主婦が疲れ切ってしまうという危険性もあります。家庭の温かみというのはどうしても犠牲になります。また夫より妻の給料の方が多くなった場合、どちらの立場が優先されるかという問題が必ず起ります。しかし、これらは、家族全員が理解し合い、努力し続けることができれば解決できない問題ではありません。ただ、その場合でも、問題にぶつかつたら、よく祈り考えて、軌道修正したりやり直したりする柔軟性が必要です。

特に大切なのは、何のために働くかという目的をはっきりさせることです。

## 7 家庭と中年の危機

これも、今日、目立ち始めています。特に家長が、何の前触れもなく、うつ状態になつたり、突然、出社しなくなったり、家を出たり、自殺をしたりするのです。

そのおもな理由は、体力の衰え、自分がしてきた仕事への幻滅、妻と家族から評価されなくなることなどです。これは、今まで自分自身だと思い込み、馴れ親しんできた自分らしさがどんどん崩れ、何も残らないと感じる自己崩壊の危機です。

しかしこの時こそ、もう一度、神について、自分について、罪について、さばきについて、永遠の救いについて考え直す良い機会なのです。ただこのような危機に陥っている時は、心が混乱し、建設的な考え方ができなくなり、破壊的なものの考え方をしますので、牧師や先輩のキリスト者の助けを求めることが大切です。また、自分の殻に閉じこもりもりしますので、まわりの人々が理解を持つて、牧師や医師に相談することを勧める」とも大切です。ふだんから教会生活やキリスト者の交わりは、この問題の解決についても、大きな力となります。もちろん婦人にも、この危機があります。やはり、主婦としての働きや、今まで我慢してきたことが誰からも何の評価も受けず、全く空しく感じられたり、自分はわなにかかっているのではないか、世間にだまされてきたのではないかと感じる時です。

しかしこのような課題の解決こそ、私たちの信仰の本領なのです。神は、人がそのような危機を持たざるを得ないような者だからこそ、キリストをこの世に遣わし、私たちをみもとに招いてくださったのです。この福音に目が開かれて初めて、私たちは人間の真価と自分の真価と悟ることができます。

## 8 熟年と老年

熟年は、多くの貴重な経験が内にたくわえられ、知恵に満ちる時です。教会で、若い人たちに、また求道者や新しい信者に、その知恵をもつて聖書を解き明かすことができれば、どんなに大きな助けになることでしょうか。ふだんから、そのような準備を心がけようではありますか。特に夫婦で、教会の鍵となるような青年を育てることができれば、福音宣教や教会の成

長の大きな力になります。また、人の苦労や痛みや物事の本質などもよく見えるようになる時なので、とりなしの祈りに熟練する時期でもあります。やがて老年になつた時に、力あるとなりなし手となる備えをしたいと思います。

老年期になると、からだが不自由になり、痴呆症に陥ることも、心がかたくなり、対人関係が困難になることもあります。この時期には、本人の祈り、家族や教会の祈りが必要であり、キリスト者の訪問と交わりが、特に喜ばれます。

一方、からだの不自由な高齢者のために、クリスチヤンの老人ホームをつくる、在宅ケアーの組織をつくる、子供が親の面倒をみることができる態勢をつくる、老人ホームを訪問するボランティア活動を組織するなど、多くの必要な課題があります。

## 9 死

肉親の死は、その家族にとつては大きな悲しみです。特に子供に先立たれた親の嘆きは大きいものです。まだれにとつても、未知である死は大きな恐れや不安をもたらします。ですから私たちは、死を感傷的に考えるのではなく、神がどう見ておられるかをまず知るべきです。

聖書によると、死は私たちの消滅ではなく、肉体と靈の分離で、ちはもとあつた地に帰り、靈は神に帰るということです（伝道一二・七。創世一一・七参照）。そして、人には、「一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」（ヘブ九・一七）のです。だからすべき人は、「善であれ惡であれ、各自その肉体にあつてした行為に応じて報いを受けること」（二コリ五・一〇）なります。救われた者は永遠の祝福を受け、滅びる者は永遠の刑罰を

受けます。そして神が、永遠に残るものとして特に評価しておられるのは、「信仰と希望と愛」（一コリ二三・二三）です。

そういうわけで、死は私たちの今のあり方や価値観やことばや行動に深くかかわってきます。それらがどうあるべきかを考えさせ、罪やむなしいことから私たちを離れさせ、いつまでも残る真実なものを求めさせるのです。つまり死は、生ける真の神を呼び求めさせ、待ち望ませるのであります。

肉親の死に直面した時は、いたずらに悲しみの中に沈み込んで、故人の信仰や希望や愛を覚え、神と人に対する私たちの信頼と希望と愛を深めることを覚えたいものです。

また、人の死には葬儀が伴いますが、肉親の場合は、教会に連絡し、牧師に相談しましょう。また、慰めと励ましを祈つてもらうことができる」とも、覚えておきましょう。

## 七、結婚式の手引き

### 1 式の目的

結婚は、男子または女子が両親を離れ、一人で一心同体として新しい家庭を築き上げて行くことで（創世記一二四）、神が定められたことですから、結婚式は、結婚しようとする男女が神と教会の前で互いにその意志を表明し、誓約するためのものです。単なる形式ではなく、両親を初め、人々からも祝福を受け、社会的にも夫婦として認められる、厳粛で、喜びと祝福に満ちたものです。

### 2 準 備

結婚しようとする場合、一人の間で意志の確認ができたら、結婚式の目的にそつた最もふさわしい準備をするために、できるだけ早く牧師に報告し、助言を受けつつ、式までの備えを始めます。本人同志や家族間だけで決めたり、式を挙げたりした後で、事後報告するようなことは良くありません。

### 3 日 時

大安や仏滅などの暦は、人が決めたもので、こだわる必要は全くありません。むしろ、教会暦や教会行事などを十分考慮し、教会の都合や関係者一同の都合などを配慮して、よく相談してから決めましょう。

### 4 場 所

式は必ずしも、教会でしなければならないことはありませんが、主の栄光を現わし、祝福を受ける場として、礼拝堂は、何と言つても最適です。

### 5 式と披露宴

一般に式に統いて披露宴が開かれますが、厳粛な神のみ前での誓約の後、明るくなどいやかな雰囲気の中で、新しく夫婦になつた二人を心から祝福する場となります。一般に式にはどなた

でも参加していただき、祝福を受けると同時に、自分たちの信仰のあかしの場としても用います。しかし、予想される列席者数や費用、会場の広さ、その他を考慮して、披露宴は次のような方法を工夫してみるとよいでしょう。

(1)式に列席してくださった方全員を対象とする。

(2)あらかじめ特定の方々だけに絞って招待する。

(3)まず簡単なもてなしで、式の列席者全員を招待し、その後、場所をあらためて親族など、特定の人だけを対象に会食する。

しかし、披露宴は、必ずしなければならないものではありません。ただ結婚の意味を考えれば、披露宴を開き、多くの方々から祝福のことばを受けるのは、適切なことです。準備においては、結婚式の目的が正しく果たされるように内容を決めればよいので、こういう式典につきものの偶像礼拝とかかわりに支配されないようにさえ気をつければ、自由に工夫してよいでしょう。

## 6 実際

- (1)司式者、日取り、式場、招待者の概数の決定。
- (2)案内状の印刷、発送、プログラムの決定、印刷。
- (3)披露宴の内容と司会者の決定、諸費用の概算。
- (4)出席者の確認、式及び披露宴の役務の分担依頼。
- (5)リハーサル

## 八、葬儀の手引き

### 1 教会に連絡する

臨終に際して、家人はまず教会に連絡します。心を静めて静かに賛美し、聖書（詩篇一一六篇など）を読み、祈ります。召されたら、ただちに教会に連絡し、親族に「キリスト教式」で行なうことを表明して葬儀の準備にかかります。

### 2 遺体の処置

硬直する前に、つまり、死の直後に行ないます。看護婦や葬儀屋に任せられればそうしますが、できない時は家人を励ましつつ、牧師が指導して行なうこともあります。

### 3 死亡診断書

医師から死亡診断書を受け取り、市町村役場に届け、火葬場の都合を聞き、日程を決めます。（葬儀屋に頼む時は、葬儀屋がこれらの手続きをします。）住民登録のある市町村以外で火葬する場合、診断書は二通必要です。診断書が入手できない時でも、役所での受付はしてもらえますので、まず火葬許可証をとることです。役所は、終業時でも受付をしてくれます。

### 4 死亡通知

必要な所にもれなく連絡できるように、連絡先はあらかじめ確認しておきます。連絡の際、「キリスト教式で行なうため、仏式や神道式の供物、しきびなどは御辞退申し上げます」とつけ加えることも大切です。

## 5 式場

①教会で行なう場合、②自宅で行なう場合、③病院から直接、火葬場へ行く場合などがあります。また、前夜式は自宅で行ない、葬儀は教会で行なう」ともあります。必要に応じて決定します。

どこで行なう場合でも、異教の習慣や様式をいっさい排除して、復活の希望のある聖い雰囲気をもって、式場を整える必要があります。多くの場合、家人は心身の余裕がありませんので、教会員の兄姉は積極的に奉仕しましょう。葬儀屋に依頼する場合は、「キリスト教式」で行なう旨を伝えておくことが大切です。

## 6 葬儀のプログラム

一般の人々には、キリスト教式の葬式はなじみが薄いので、不安や反発が起ころる場合がよくあります。あらかじめプログラムの全体とその趣旨、また、特に注意して欲しいことなどを印刷して手渡しておくと、理解が得られ、良いあかしができます。

### (1) 納棺式

柩が届いたら、前夜式の前に牧師の祈りの後、近親者だけで納棺します。衣類は、故人の愛

用のものか、新しいものを着せておくのがよいでしょう。

### (2) 前夜式

仏式では「通夜」と言って、惡靈よけのため徹夜で行ないますが、前夜式は、そのような目的ではありません。故人に特に親しい人が集まりますので、聖書をもとにして、故人のあかしをわかち合ったり、賛美したり、祈ったりする時とします。

多くの場合、遺族は既に心身共に疲れ、なおすべてが終わるまでは疲れることが多いので、一時間以内の集いとして早めに終わるようにします。キリスト教式の葬式の意味などを説明し、特に遺体を礼拝しないことなどの理解を得ておくことも大切です。

### (3) 葬儀

あらかじめプログラムを印刷し、プログラムに従つて進め、一時間以内に终わります。靈柩車の到着時に出棺できるよう時間に注意します。

### (4) 火葬場にて（埋葬式）

柩が着くと、焼香台などが用意される場合が多いので、「キリスト教式」であることを伝え、取りのけてもらいます。そして、炉の前に円形に集まり、賛美し、聖書を読み、牧師の祈祷をもつて終わります。なお、火葬許可証を忘れないようにします。

### (5) 拾骨

家族、親族が中心に拾骨します。特別な事情がない限り、分骨しないようにすることです。分骨すると、分骨先で異教によって取り扱われることが多いからです。

骨壺は、納骨まで、教会に預けるのが賢明です。家に持ち帰ると、たいへん苦労する」とが  
あります。

#### ⑥納骨式

適當な時期に、牧師の指導のもとに行ないます。葬儀から余り時間をおかずには納骨する方  
が、いつまでも負担が残らずよいでしょう。拾骨後、その足で納骨するのもよいことです。

#### ⑦記念会

仏教の法事とは違います。葬儀と同様、遺族の慰めと励ましのため、故人をしのび、その信  
仰のあかしを記念します。この時は、故人の信仰やあり方を通して、遺族や親しい人々に福音  
をあかしする機会にもなります。牧師を招いて、聖書からメッセージをしてもらうこともでき  
ます。まず、召天後一ヶ月ぐらいに行なうと、この記念会を区切りとして心が一新され、新し  
い思いで、生活を整えるができるでしょう。

その後は、一年目などと、適當な時に行なうとよいでしょう。また、教会全体で合同記念会  
を開いたり、特別に年一度の記念会を開くのもよいでしょう。

#### ⑧墓地

教会などで、共同墓地を設けるとよいでしょう。墓地は、礼拝の対象ではありません。故人  
の記念の場なので、墓石は拝みませんし、供物、供花はしません。記念の場にふさわしくする  
ために、芝生や植木をするのもよいでしょう。

## 7 葬儀についての注意

#### ①供え物

「まことの神のみを拝む」とこそ故人の喜ぶことであることを話し、供え物は、あらかじめ辞  
退します。

①「花」——式場を白菊、ゆりなどで飾るのはよいことですが、盛花に名札をつけたり、贈り

主の名を記した花輪を置いたりしないようにします。

②「香典、靈前」——これは故人を礼拝することを意味しますので、むしろ、遺族への「お慰

め」「志」「哀悼」などとして贈ります。

③「献花」——献花は原則として行ないませんが、行なう場合には、死者礼拝の一つと誤解さ  
れないよう注意します。

④「焼香」——焼香は、仏法僧の三宝に帰依することなので、行ないません。

⑤「遺影」——これは、死者礼拝につながりやすいので、取り扱いに注意します。

#### ②弔辞

仏式では、故人に對する語りかけを弔辞としますが、そこにあるのは遺体ですから、私たち  
は、遺族に対する慰めの言葉や、会衆に対する故人の紹介、あかしとして行ないます。

#### ③未信者の葬儀

未信者の家族の葬儀も、依頼によつて、教会で行なうことができます。

#### ④教会員の配慮

葬儀に際しては、牧師は多くの大切な準備をしなければなりませんので、役員初め教会員  
は、この時を愛のあかしの時として、積極的に愛の労を取りましょう。

すべてのキリスト者は、教会の一員、家族の一員であると同時に、社会の一員でもあります。從つて、キリスト者も当然、自分の住んでいる地域、都市、国家に対する権利と義務と使命を持っています。

## 一、政治

キリスト者が、意識的に政治の諸問題を避けて通るようなことをしてはなりません。キリスト者は、この地上において、主のみこころにかなった政治がなされるように政治に取り組み、キリスト者にふさわしい方法で参加する心構えを持つべきです。

### 1 政治の聖書的意味

国家には、秩序を守るために、神によつて権威が与えられています。「人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によつて立てられたものです」（ロマ一三・一）。国家は、最高の権威が神にあることを覚え、神のみこころにかなう立法、行政及び司法を通して、国の正義、公平、秩序、平和を守る責任があります。他方、キリスト者も、一国民として、憲法を守り、裁判を重んじ、政治を見守る責任があります。「したがつて、権威に逆らつている人は、神の定めにそむいているのです」（ロマ一三・二）。

しかし、キリスト者は、国家が神のみこころを軽んじ、与えられている権威を正しく用いなか

つたり、信教の自由を束縛しようとすると時には、最高の権威である神に従い、あるべき立場に立ち戻るように、国家に対しても警告しなければなりません。

## 2 政治に対するキリスト者の責任

### ①祈ること

キリスト者は一国民として、為政者のために、またその政治が神に喜ばれるものとなるように、とりなしの祈りをすべきです。なぜなら、それはキリスト者の特権だからです（イテモ二一）。

### ②政治への参加

#### ①選挙

選挙などを通して、政治に参加する機会が与えられた時には、キリスト者の政治家や眞の平和に役立つ政治家が起これられ、用いられるように、棄権しないで、積極的に参加しましょう。

#### ②政治活動

通常の場合、キリスト者の政治活動は原則として、個人的にするのが望ましいことです。しかし、信教の自由が束縛されるような場合、キリスト者は、教会を挙げてその問題と取り組まなければなりません。教会への至上命令は福音宣教であり、教会の使命の第一は伝道ですから、教会の中に政治グループを作つたり、政治活動を第一にしたりすることは、キリスト者として避けるべきです。

### 3 教会と国家との関係

教会は、教会の使命達成のために政治を利用すべきでなく、また国家も教会に介入すべきでないという政教分離の原則は、教会が長い歴史の中で学んできた尊い教訓です。教会と国家が一体化して、共に迷い出るようなことを繰り返してはなりません。教会は国家を利用したいという誘惑を退けるとともに、国家が教会に介入したり、信教の自由を束縛する時には、そのような国家のあり方に反対しなければなりません。

## 二、職業

キリスト者はそれぞれ、自分にふさわしい職業に就いて労働に励み、その労働を通して神に仕え、社会に貢献します。「主イエス・キリストによって、命じ、また勧めます。静かに仕事をし、自分で得たパンを食べなさい」（Ⅱテサニ・一二）。

### 1 労働の聖書的意味

労働は、神が被造物を支配させるために堕落以前のアダムに与えられた任務でした。最初の人アダムは、労働に励むことにより、神の祝福にあずかり、神への奉仕をしていました。「神である主は、人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた」（創世二・一五）。

しかし、アダムの墮落によって、労働は苦役となり、パンのために汗を流して苦しむなければ

ならなくなりました。人の墮落によって、労働もまた本来のあり方からそれてしまったのです。「あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまつた。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならぬ」と（創世三・一七）。

この状態は、新天新地の到来する時まで続きます。しかし、キリストの十字架によって神の救いにあずかったキリスト者は、墮落した世に生きつつも、同時に、本来の意味での労働の回復を許されている者です。キリスト者は喜びと感謝をもって労働に従事し、与えられている賜物や能力を見い出し、それを活用し、神に仕えてゆくのです。すなわち、キリスト者には、この世の組織や秩序の中にあって労働に従事しますが、この世の人々にはない「労働を通して神に仕える」という明確な目的が与えられているのです。

## 2 職業の選択

神がみこころとしておられる職業に就くことは、キリスト者の特権であり、祝福です。神は、救われた一人一人のために、どのような職業に就くべきか計画を立て備えておられます。ですから、神の意図された職業に就き、神の計画された人生を歩むキリスト者は、その職業を通して神の永遠のご計画に参加しているのです。

キリスト者が、自分の就職や、人生の設計などについて計画を立てる時は、まず、聖書を読み、祈り、聖霊の内なる導きを求めることが大切です。また、神から与えられている賜物を吟味し、更に牧師や信仰の友にも相談し、祈つていただき、客観的な意見にも耳を傾け、総合的に神

のみこころを求めながら、最終的な決断を下すようにしましょう。単に給料、自分の好み、社会的評価等だけを判断の基準にし、神のみこころを求めるで職を選んだ場合、後になつて苦しむことになります。

神が意図しておられる職に就いたキリスト者は、神の永遠のご計画の中に加えられているばかりでなく、その仕事（職）に励むことによつて、神の栄光を現わし、自分の内にいつも喜びと確信を味わう幸いな生涯を過ごせるのです。

しかし現実には、神のみこころを求めて就職したために、後になつて、仕事に対する情熱と確信を失い、現状に留まるべきか、それとも転職すべきかと思い悩む人も少なくありません。そのような時には、原点に戻つて、主のみこころを求めていくことが大切です。この項の前半に記したように、聖書を読み、祈り、聖霊の導きを求め、牧師や信仰の友に相談し、祈つていただき、最終的判断を下すようにしましょう。

しかし、キリスト者にふさわしくないと思われる職業に従事している場合には、大胆に退職し、新しくキリスト者にふさわしい職業に就いて、その仕事を通して神の栄光を現わすようになるならば幸いです。

### 3 働く態度

雇用者（事業主、経営者）であれ、被雇用者（労働者）であれ、主に仕えるように働くのがキリスト者にふさわしい態度です。

被雇用者は、雇用者がキリスト者であるような場合、主にある兄弟だからと軽んじることなどな

く、また雇用者が未信者であつても、キリスト者として召された者にふさわしく主に仕えるように忠実に仕えるべきです。聖書には、奴隸にも、主人に対して従順であるように教えられているのです。奴隸でなく、自由な労働者であるキリスト者はなおさら、進んで労働に励むように心がけることが期待されるのです。そのように励む者に対して、主の豊かな報いが備えられているのです。「人のこきげんとりのよくな、うわべだけの仕え方でなく、キリストのしもべとして、心から神のみこころを行ない、人にではなく、主に仕えるように、善意をもつて仕えなさい。良いことを行なえば、奴隸であつても自由人であつても、それぞれの報いを主から受けることがあります」（エペ六・六～八）。

また、雇用者がキリスト者である場合、主から多くを任せられている幸いを感謝し、暴利を得ることを目的とすることなく、神と人とに貢献できるように心がけましょう。また、労働者への公平な利益の分配に心を用い、神への献金においても、「良い忠実なしもべ」として主に喜ばれるようにささげましよう。多くを委ねてくださった神に、多くのものを返す時、更に多くのものを任せてくださいる神の恵みを体験できることは幸いなことです。

神は、雇用者、被雇用者のいずれであつても、主に仕えるように忠実に働く者を、その労働を通して訓練し、品性を練り上げ、更に多くを委ねてくださるのです。「よくやつた。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びとともに喜んでくれ」（マタ二五・一一）。

より良い労使関係が保たれて、労働者と経営者が共に喜んで働けることが、すべてのキリスト者の願いです。キリスト者は、その立場と教会生活との調和を十分に考慮して、労使関係の改善、労働条件の向上に尽力すべきです。

## 5 職場でのあかし

キリスト者として、職場で、仕事を通してあかしをし、また、祈り会や聖書研究会などを自発的に行なうことはキリスト者の特権です。許されば、教会の牧師や兄姉を招いてメッセージやあかしの機会を持つこともすばらしいことです。そうすれば、教会の兄姉がその人の職場をよく理解して祈ることができ、職場でのあかしにも力が与えられるようになります。

## 6 日曜出勤

社会人の直面する問題の一つに、日曜日の出勤があります。キリスト者は、可能な限り日曜出勤をしないで済むように工夫し、努力することが必要です。週一度の休日はすべての労働者に不可欠な要素の一つです。会社全体が日曜休日になるように努力しましょう。しかし、一般企業において、製造工場などは年中休みなく稼働しております、常時、日曜日に休みを取ることは困難です。また、私たちの日常生活に欠くことのできない職業、例えば、電気、水道、交通機関、病院、警察署、消防署などのいわゆる公共的な事業に携わっている人々の場合も同様です。

しかし、その実行が困難な職場であっても、個人として週日の仕事をわざわざ日曜日に持ち込むようなスケジュールを組んだりしないこと、また、日曜の自主出勤が期待されているような職

場では、それに応じないで休むようにして、主を礼拝するようにしましよう。神は、私たちが忙しく働く前に、まず主のみ前に出て静まり、賛美し、礼拝するように期待しておられるのです。「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい」（マタ六・三三）。

## 三、対人関係

私たちの国においては人の和が何よりも重んじられ、個人の価値や意見が軽んじられる傾向があります。神の目から自分を見つめ直した時、私たちは自分自身の価値に目覚め、他の人を見る目も変えられました。神のみことばに導かれて、新たな対人関係を築いてゆくことは、とりもなおさず生活を通してのあかしにほかなりません。

## 1 日本社会の対人関係の特徴

人の和を乱さないことが大切にされるこの社会では、個人の独自な生き方は軽視されるばかりか、「出る杭は打たれる」と危険視さえされる傾向があります。全体の方向へ賛成し協調することが美德とされ、ひとり違った意見を述べる者や個人の権利をはつきり主張する者は白い眼で見られがちです。「長いものには巻かれろ」式の世渡りの知恵や、みんながいっしょであれば安心する「集団思考」は今なお健在です。

このような社会で人の行動を規制するのは他人の目、すなわち恥の意識です。しかし、恥の道徳も人に見られない所では力を失い、「旅の恥はかき捨て」とばかりの日本人の海外での節度の無さや不道徳は、特にアジア各国から非難され続けています。何が正しいかの絶対的な基

準を一人一人が持たないこと、言い換えれば、絶対者なる神の前に生きるという信仰が決定的に欠落していることの結果だと言えます。

私たちはこのような社会・対人関係の影響を受けて生まれ育つ中で、キリストの救いに導かれました。罪赦された者として神の前にひとり立ちし、そこから新しく人とかかわっていく者とされました。キリストにあって新しくされた者として、神は私たちをこの社会に遣わしてくださいっているのです。「真理によって彼らを聖め別つてください。あなたののみことは真理です。あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました」（ヨハ一七・一七～一八）。

## 2 聖書から見る対人関係

### ①主にあつて自立した生き方

「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」（イザ四三・四）と言つてくださる神の前で、私たちは初めて自分自身の存在を心から喜ぶことができるようになりました。人の顔色や世間の評価にふりまわされないで、私という存在を限りなく大切にしてくださる神に対して、感謝をもって生きることができるようになつたのです。人が評価してくれるから自分に価値があるとする人は、人の評価をなくせば生きる基盤を失います。人にえられなければ生きられない弱さがそこにはあります。主の前に立つ時、私たちは自分の価値や、生きる意味を見い出します。誰も見ていても、神の前に良いと思うことに生きていける自立した人格に造り変えられてゆくのです。

### ②共に生きること

みことばは「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」（レビ一九・一八）と命じています。神の前で自分を受け入れ、自分を愛するならば、自分とは異なる他の人をも受け入れ、その違った生き方をも尊重すべきです。違いを持った人間同士が共に生きる時、摩擦やあつれきが起こることは避けられません。しかし、「集団思考」と言われるよう、私たちは摩擦を避け、まわりの人と同化し、みんなが同じ生き方をすることに慣れています。異質な人間が共に生きる緊張に耐えられない弱さを、私たちは持っています。主にあつて新しくされた私たちは、神の前に自立した生き方を持ちながら、自分とは違う他の人も受け入れつつ共に生きる新しい対人関係を築いてゆきたいものです。また、他の人を利用するのではなく、他の人のために生き、仕える関係を求めてゆきたいものです。

### ③権利意識

一人の人の神の前での絶大な価値を知らない日本人には、権利意識が非常に希薄です。何ができるかとは関係なく、一人の人間としての自分の権利を自覚できない者は、他の人の権利も平気で踏みにじってしまいます。特に、みんなと同じでない人、同じようにできない人には、人としての当然の権利もないかのごとくに考えてしまいます。在日外国人、心身の障害や弱さを持つ人の権利を守るべきこと、「労苦して弱い者を助けなければならないこと」（使徒一〇・三五）も神の命令です。「在留異国人を苦しめてはならない。しいたげてはならない。あなたがたも、かつてはエジプトの国で、在留異国人であつたからである。すべてのやもめ、またはみなしを悩ませてはならない」（出エ二二・二一～二二）。

#### 四、伝統的宗教行事

日本人一般の宗教生活は現世祈願と祖先崇拜とから成り立つてゐると言われます。新年の無病息災を願う初詣から入試合格・商売繁盛・交通安全祈願など、神社に詣でる人の数は近年も増え続けています。核家族化により伝統的な「家」が崩壊しているとはいえ、盆には祖先の慰靈を兼ねた帰省が国民的行事となっています。個人的には無宗教を標榜する人が多いにもかかわらず、忌日の法事は当然のごとく各「家」で営まれています。

このような日常化した伝統的な宗教行事の数々は、日本における福音宣教に様々な障害となっています。かわりを余儀なくされるそれらの宗教行事にどう対処するかを考えるとともに、そこに対現された日本人の宗教心を手がかりにして伝道してゆくことも求めてゆきましょう。

##### 1 祖先崇拜

###### ①由来

祖先を崇拜する風習には、亡くなつた近親者を敬慕するという自然な感情もありますが、その背後に死者の靈魂（死靈）のたたりを恐れる怨靈信仰が存在することに注目すべきです。亡くなつたばかりの死靈がたたることのないように、その子孫は鎮魂儀礼を繰り返し行ないます。一般的に三十三回忌をもつて弔い上げとし、死靈は個性のない祖先の靈（祖靈）に融合し、子孫を守り、恩恵を与える守護神的存在になると信じられています。

祖先崇拜というと仏教行事のように思われていますが、インドに発した仏教そのものは祖先崇拜とはかわりのないものです。しかし、日本の仏教教団は日本古来の祖先崇拜にもっぱら従事することによって、日本社会にこれだけ浸透することができたのです。近代以降の新興宗教ブームを見ても、それらの新しい教義の中核には祖先崇拜が必ず据えられてきました。それだけ日本における祖先崇拜の問題は根が深いことに注目すべきです。

###### ②死者（祖靈）崇拜・追善供養

このような宗教的背景を持つ国で私たちはキリスト者として生き、福音を伝えていこうとしています。まず第一に、偶像崇拜は避けなければなりません（出エ二〇・四～六）。死者を挙むことや、常設の祖先祭壇としての仏壇および祖靈の依代としての位牌や墓に手を合わせることは、はつきりと避けるべきです。聖書の神のみを神とすることは私たちの信仰者生命にかかることです。

死者（祖靈）崇拜に付属する焼香は、日本では葬儀や法事の席で死者への追善供養として、すなわち死者の冥福（死後の幸福）を祈る行為として行われます。しかし、死者の靈は神の御手のうちにあります。もはや私たちは死者に対して何をもなしえないという死の厳肅さを受けとめ、死者への供養としての焼香も明確に避けるべきです。

カトリック教会は死者のための祈り、死者への追善供養を行うことを、その教義のうちに持っています。第二バチカン会議以降、日本のカトリック教会は祖先崇拜行事にそのまま従うようとの指令を出しています。聖書に基準を置かず、日本の異教的習慣に無批判に迎合するカトリック教会の態度を私たちは悲しみ、批判せざにはいられません。

### (3) 祖先の追慕・親族の交わり

祖先崇拜行事は亡くなつた親や祖先を追慕し、親族が交わりを持つ機会でもあります。親や祖父母の恩を忘れず、その思い出をしのぶことは大切なことです（出エジプト二〇・一一）。ふだん会うことのない親族が久しぶりに集まる葬儀や法事には、それゆえに思慮深く対応すべきです。全くかかわりを絶つてしまふのでなく、偶像崇拜となることは避けつつも、祖先の追慕・親族の交わりという面ではかかわっていく道を、柔軟に求めてゆきましょう。

#### ④あかし

更に、近親者の死によつて親族が集まる時を積極的にあかしの機会としたいものです。思わしくない出来事に会うと、祖先の靈がただつてゐるのではないかといふ恐れに捕われるのが、今もなお日本人の現実です。真に畏れ敬うべきは聖書の神であることを伝え、その神に頼る者には、人生の試練の時にも平安が与えられることをあかししてゆくべきです。

長男は仏壇や墓を守り、祖先祭祀を絶やしてはならないと考えるのは、そのようにして保たれてきた先祖代々の「家」こそ、日本人がそこに自分を帰属させて安心感を見い出せる最終的な基盤であるからです。人が魂を深く安堵させられるのも、人生の意義を本当に見い出せるのも、創造者なる神のみ前に立ち返つた時だと伝えてゆきたいものです。「あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしていなさい。ただし、優しく、慎み恐れて、また、正しい良心をもつて弁明しなさい」（Iペテ三・一五）

（一六）

自分が長男で祖先祭祀の責任者である場合は、忌日の法事を記念会に変えてゆけばどうでし

ようか。牧師に来てもらつて聖書から話をしてもらい、亡くなつた親族をしのびつつ親しく交わる時を持つのです。そのようなあかしと弁明の努力を続けながら、最終的には仏壇や位牌をも処分して、その「家」の祖先崇拜を廃止するのが私たちの目標です。これは日本という異教社会に遣わされた私たちに与えられた大きな伝道事業だと言つべきでしょう。

## 2 習俗

日本における祖先祭祀は「家」においてだけでなく、「村」や「国」のレベルでも行なわれてきました。そのいずれの場合でも、構成員全員の参加を当然のこととく求める性質を持つています。そして、それはやがて宗教行事であることさえ意識されなくなり、社会的慣習すなわち習俗として受けられてきました。そのような習俗化した宗教行事が私たちの信仰生活を圧迫するのは、「家」における祖先崇拜の場合と同じです。

#### ①「村」・地域の祭り

「家」において祖先祭祀が営まれると同様に、「村」においては共同の祖先であり守り神である氏神（産土神・鎮守の神）が神社を基盤に祭られます。豊年祈願・豊作感謝を中心とした村祭りが受けられてきました。この村祭りは住民すべての参加・協力を当然のこととしてきました。

今日、ほとんどの町内会が地域の神社に町会費から奉納金を納めているという現実は、このような経緯によります。秋祭りや地蔵盆なども、それが宗教的行為であることが意識されないほどに習俗化されていながら、住民の参加は当然のこととく求められてくるのです。日本国憲法

は個人の信仰の自由を保障し、事実上行政の末端組織である町内会が宗教的活動を行なうこと

を禁止していますが、現実はそれとはほど遠いものがあります。

このように共同体の宗教儀礼が慣習化された地域社会の中で、私たちは信仰者として生活し、あかしを立ててゆこうとしています。やはり、避けるべきは明確に避けつつも、地域の交わりや奉仕にはそれだけに積極的にかかる姿勢を持つべきでしょう。また、機会を生かして町内会などでも私たちの信仰を弁明し、そのような個人の信仰の自由が現行の憲法で保障されていることをも示してゆきたいものです。

## ②「国」・天皇の祭祀

近代日本において形成された国家宗教としての国家神道は、「家」や「村」を統合してきた祖先祭祀が巧みに援用されています。天皇を父とする家族国家觀を打ち出し、天皇および皇室の祖先神とされる天照大神への崇拜を「国」の宗教として強制したのです。それは、天皇のために戦って死んだ「英靈」を「国」の最高祭司である天皇が祭るという、戦争遂行のための国宮の靖国神社の設置にもつながりました。戦後、天皇は「象徵」とされ、「国」と神社・神道とは分離されました。しかし、天皇は今なお皇室神道の最高祭司という宗教的存在であり、再び天皇を祭司王として「国」を宗教的にも統合しようという運動は厳然として存在するのです。

靖国神社を国営化する法案が五度にまでわたり国会に提出された異様さを忘れてはなりません。その後、元号の使用が法律上義務づけられました。天皇の一世一代で元号を変える制度は、明治の天皇制国家が作り出したものです。現在の天皇の即位にまつわる大嘗祭も、神道神話に基づく宗教的儀式が国の公的な行事として巨額の国費を費やして行なわれました。国家の

統制が一番影響を受ける教育の現場では、日の丸・君が代を義務づける動きが既に進んでいます。

このような動きに私たちは備えなければなりません。「国」レベルの迫害の中に、戦後の日本基督教は置かれたことはありません。そのような時にも堅く立ちうる教会の形成を私たちは目ざすべきです。戦前・戦中、信仰的な節操を曲げなかつた宣教師たちによって創始された福音交友会のよき伝統を守つてゆきたいものです。

## ③習俗論

今日、「習俗化した宗教行事や宗教的行為は宗教活動とはみなさない」という公的な判断が存在することを、私たちは見過ごしにできません。一九七七年の津地鎮祭の最高裁判決は、津市の行なった神道式の地鎮祭について、それが宗教的因素を持つものであることを認めながらも、憲法二〇条の政教分離の原則に違反しないとしました。その理由は、地鎮祭は習俗だから、ということだったのです。地鎮祭は習俗であり、特定の宗教を援助・助長したり、布教活動を促進させるような目的や効果を持たないから、津市は憲法に違反する宗教活動をしたわけではない、というのです。「目的効果論」と呼ばれるこの解釈理論は、その後、信教の自由をめぐる一連の法廷闘争に必ず持ち出されるようになりました。

「習俗化した宗教行事は宗教活動にはあたらない」というのですが、伝統的な宗教行事はみな習俗化してゆくものですし、習俗化しても全体の参加を当然のとく要求する宗教的意味合いをなくすわけではないのです。この論理は、戦前の宗教統制に用いられた「神社は宗教ではない」という強弁にどこか似ていると言えないでしようか。

以上のように、「家」「村」「国」などの段階でも、構成員全員の参加を余儀なくせる伝統的宗教行事との戦いを私たちは避けることができません。パウロがローマ市民権に訴えたように、憲法が保障する信教の自由という権利に訴えつつ、この社会に対して預言者の発言をしていくことも意義ある行動でしょう。異教の国で眞実に神に仕えたダニエルたちのように、様々な異教の慣習の中で主にあって生きる道を粘り強く求めながら、偶像崇拜の強要に対しては、はつきりと拒否する姿勢を持って、私たちはイエスを主と告白する信仰をこの世にあかししてゆきましょう。

## 信徒必携

1992年12月25日発行  
編集 信徒必携改訂版編集委員会  
発行 福音交友会  
堺市浜寺昭和町1丁63  
印刷 泉文社  
改訂版1300部印刷

© 福音交友会